

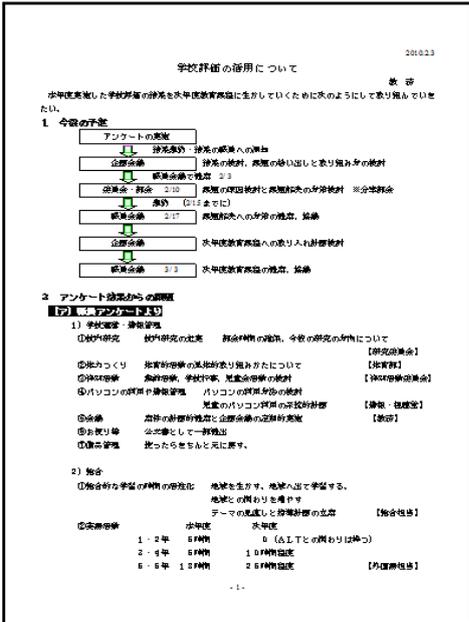
1 実践内容

学校は組織体であり、言うまでもなく組織による日々の活動がどのように行われるかによって教育活動の在り方や成果が違ってくる。学校における「学校力」をどのように高めていくかが大切である。「学校力」とは、学校が組織体としての特性を生かし、創意工夫や協力・協働による学校教育目標の具現化を図っていく力であると考える。



こうした力を高めていくためには、学校組織の職員が統一した方向性を持ち、計画的、系統的に学校教育活動を実施していくことが必要である。校長や教頭のリーダーシップはもちろんであるが、各職員との連絡調整や指導助言にあたる教務の役割は大きい。

そこで、年度ごとにまとめをし、毎年同じベースからのスタートをする学校組織ではなく、職員の異動等による変更があっても前年度からの積み上げを基にした円滑でより高まりのある学校組織であるために、教務として工夫してきたことを以下に挙げる。



(会議資料：学校評価の活用について)

(1) 学校評価の結果を次年度の教育活動に生かすために

学校評価の結果から、企画会議を生かして本年度の取組の様子を学校教育目標の項目毎に達成状況を考察し、次年度の課題や取組の方向性を見いだすようにした。そして、職員が課題や取組の方向性を共通理解できるように、会議資料の提示の仕方を工夫してきた。また、次年度教育課程の編成においても、前年度の評価を生かした目標設定ができるように、企画会議の運営や職員会議の運営を計画的に行ってきた。

(2) 学校課題の解決に向けた学校運営組織(校務分掌)づくりのために

新たな教育課程を実施して行くにあたっては、前年度と同じ組織ではなく、学校の教育課題を意

識し、教育目標達成に向けた学校運営組織(校務分掌)が必要である。そのため、企画会議を生かしながら毎年度、校務分掌(組織表)を見直し、より円滑な学校教育活動が行われるようにした。

(3) 年間を見通した教育活動を実施するために

年度初めに年間行事予定表で活動予定を示すだけでなく、各週毎の行事予定や実施時数、業前の活動や日課の取り方などについて記入した「週時程表」を作成し、全職員に配布することで各職員が見通しを持って教育活動の計画・実施ができるようにし

た。また、前年度中に次年度の各学年の年間指導計画（各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動を1つの表にまとめたもの）を作成するよう計画し、年度が変わっても方向性や系統性のある教育活動が実施できるようにしてきた。また、前年度の反省や次年度の教育活動についての方向を共通理解事項としてまとめ、年度当初に全教職員に配布することで、学校の教育活動の年度を越えての継続性を持たせ、年度当初の活動を円滑に進めることができた。

The image shows four weekly timetables for elementary school students. The top-left table is for the 2nd year (2nd semester), the top-right for the 1st year (1st semester), the middle-left for the 3rd year (1st semester), and the middle-right for the 4th year (1st semester). Each table lists days of the week and subjects like Japanese, Math, Science, and Physical Education.

(週時程表)

(4) 円滑な連絡調整のために

各学年、担当、職員との連絡調整を、時期や計画、課題に応じて適切・円滑にできるように配慮し、話し合いを重視しながら進めてきた。

(5) 研修の推進のために

研究推進委員会の運営や研究主任との協働による研修計画の立案、研修資料や教材の整備、情報収集や提供に努めてきた。

(6) 施設設備・備品の管理のために

校内全体を把握できるように常に気をつけ、施設や設備の安全管理や修理・修繕等を管理職とともに行うとともに、備品整理の計画的実施、職員作業の計画立案・実施を適切に行った。

(7) 挨拶の奨励・生徒指導の充実のために

校門での立哨指導で挨拶を奨励するとともに、その日の児童の登校の様子から気付いた生徒指導上の事柄については関係職員に連絡し生徒指導に役立ててきた。また、生徒指導主任との協働による全体指導を行うことで、学校全体での指導の方向性を示してきた。

2 成果及び課題

年度を追う毎に教育課程の見直しや積み上げ、系統性のある教育活動を実施していくことが出来るようになり、年度によって職員構成が変化しても継続性のあるものになってきている。そして、各職員が教育計画を立案しやすくしてきたことで、各分掌や分担における活動計画の検討、立案がスムーズに行われ、日程調整なども短時間でできるようになってきた。会議や研修の実施についても円滑に行われてきている。学校運営組織も各分掌での役割が明確化し、機能性のあるものになってきており、各教職員がそれぞれの役割を意識し、個々のよさを教育活動に生かしていきつつあり、各職員の教育目標具現化に向けた意識や取組も高まりつつある。課題としては、上記の成果により生み出された余裕を、教育目標達成のためにより具体化していく企画や計画立案・実施と、そのための教務部的な組織づくりや後に続く人材の育成を図ることである。

3 その他参考となる事項

吉野町立吉野小学校ホームページ <http://web1.kcn.jp/yoshisho/>

事例番号2 小学校 学校教育目標の具体化の部

「ことば」を大切に、「人と人のつながり」を大切にする子どもの育成を目指して
～話す・聞く・話し合うを中心課題として～

上牧町立上牧第二小学校 教諭 井上 昇

1 実践内容

本校では「人権尊重の精神を基盤とし、心身ともにたくましく実践力豊かな児童の育成」を教育目標に日々教育活動を行っているが、研究主任として職員に「今児童にどんな力をつけなければならないのか。」時間をかけて話し合ってもらった。

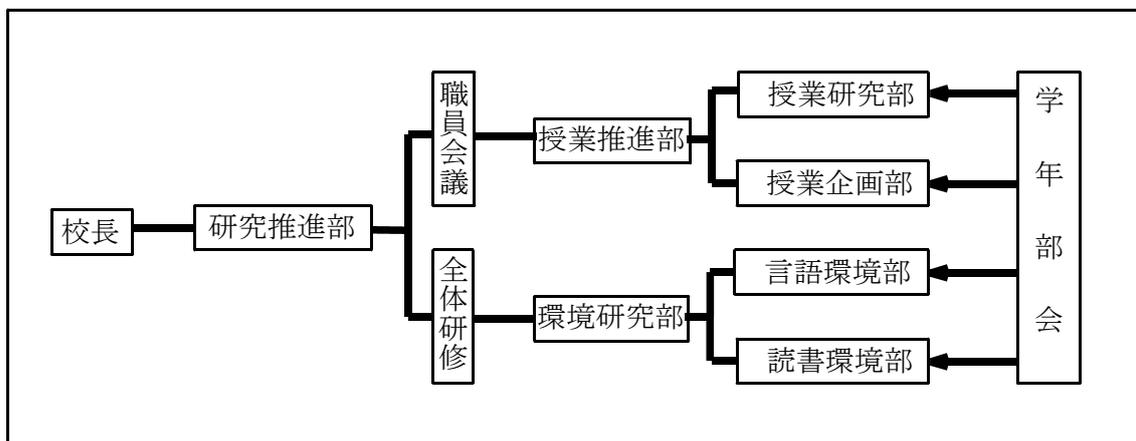
その中から「語彙数が少なく単語で話をする。」「声が小さく周りの目を気にし、みんなと違うことは駄目なことという意識がある。」「聞き返しが多く、興味がないと集中して聞けない。」

「表面上は仲良くしているが、本当の意味で仲間集団になれているのか。」などの課題が出された。そこで、「聞く」「話す」力を高める取組を推し進め、「国語力向上モデル事業」校の研究主任としてその取組の概要を報告する。



(1) みんなで取り組む研究体制作り

取組が研究部だけの取組に終わるのではなく、みんなで取り組むことを大切にしたいと考えた。そこで、全職員が「授業研究部」「授業企画部」「言語環境部」「読書環境部」のいずれかに所属し、それぞれの部会が創意工夫して取組を進める体制作りを行い、研究主任として部会をコーディネートしていった。この体制作りにより研究は全職員の主体的な取組になっていった。



(2) 授業作りから群読集会へ

年2回の児童へのアンケートを実施し、まず授業の充実に取り組んだ。授業研究部を中心に他教科との関連を考えた国語科の年間指導計画を学年間で何度も話し合い作成した。そして、「聞く・話す」力を高める授業の創造に向け、授業検討会を繰り返し行い授業の充実に向けた取組を進め、全学年による授業研究を行った。授業研究会では、研究協議の柱の提示、児童の1時間の追跡記録、板書記録、授業記録と意見が交流しやすくなるように工夫し、研究協議が深められるようにした。

授業企画部からは、話型指導や「聞き手名人」「話し手名人」・「言葉のものさし」

・1 分間スピーチ・言葉のテキストなどの日常的な活用を提起し、その成果を発表する場として、群読集会の取組を進めた。集会は回を重ねるごとに内容・発表態度ともに充実し、児童の自信へとつながっていった。

(3) 学習環境作りと読書活動の充実を

言語環境部からは、学年で統一した教室掲示を提起した。どの学級にも話型掲示・「声のものさし」・「聞き手名人」・「話し手名人」の掲示がある。また、校内の掲示板には工夫を凝らした掲示を全職員で作成し、言語環境の充実に努めた。

読書活動は語彙数を豊かにし、思考の充実に欠くことのできないものである。そこで、読書環境部を中心に、進んで好きな本を手にする児童の育成を目指して、図書室の整備・朝の読書の時間の充実・教師や図書委員会また地域ボランティアの方の読み聞かせ会を企画し、好きな本を手にとれるようになることを目指した。

同時に、3年生以上の全児童に国語辞典の購入とその活用に取り組んだ。辞書は国語科に限らずいつでも使えるように心がけ、赤線を引いたり、付箋をつけたりして、意欲を高める工夫を凝らした。今も続く赤線や付箋のたくさんついた国語辞典がこの取組の充実を物語っている。

2 成果及び課題

分かる授業の追求や授業検討会・言葉のテキストや群読集会・学習環境作りや読書活動の充実・辞書名人の取組等本校児童の力を高めていける多くの取組を全職員の力を結集して作り出すことができた。その中から、児童の多くが恥ずかしがらずそ



の場に応じた声で発表し、集中して話を聞くことができるようになり、学習意欲の高まりが感じられるようになってきた。そして、あらゆる場面で主題を意識しながら様々な取組を進めることにより、教師の授業や児童に対する意識を大きく高めることができた。

しかし、「発表する力」とりわけ内容が決まっていると話せるが考えを的確にまとめ発表していく力はまだまだつけていかなければならない。

また本校の取組を地域・保護者にもっと伝え広めていかなければならない。学校便りや PTA の会議、そして、学級懇談会や学習発表会等で伝えてはいるものの十分理解していただいているとはいえない。

今後は、この成果を継承・発展させ、これまで同様全職員の核になって、本校教育の活性化に力を尽くしていきたいと考える。

3 その他参考となる事項

上牧町立上牧第二小学校ホームページ <http://www.lint.ne.jp/~nisho/index.html>

1 実践内容

(1) はじめに

今までにたくさんのクラス担任をしてきた。幸いなことに、1～6年までどの学年も複数回ずつ受け持つことができた。ここ最近10年間は、高学年を担当しているが、どの学年を担当しても私の教育信条は同じである。そこで、つたないながらも私の担任としての取組をここにまとめた。



(2) 具体的実践

「一期一会」縁あって担任した児童が、1年間明るく元気で自分の力を発揮できるためには、まず私自身がしっかりと心構えをもつことが大切である。私の信条として以下の4つのことをいつも肝に銘じている。

- ・「おおらか」・・・大きな視野で大切に見守り、居場所があるようにする
- ・「めりはり」・・・やさしさの中で、厳しく指導する
- ・「あいさつと笑顔は、先手必勝」・・・笑顔で自分から声かけをする
- ・「やった!」・・・わかりやすい授業・心の授業で信頼関係を築く

次に大切なことは、クラスが落ち着いていて、いきいきしていることと考える。上でも述べたが、「分かる授業をしっかりとすることによりクラスは荒れない」「クラス経営は根回しが大切」ということをつくづく感じている。みんなの前で話したらいいことと、個人的にささやく方がいいことを使い分けている。また、「うまく叱る」こともいつも心がけている。このような心構えで日々児童と向き合っているが、落ち着きがあり、いきいきしているクラスにするための私なりの実際の取組を以下のア～カで述べる。

① 朝の話

朝、笑顔で明るく「おはよう」と言いながらクラスに入っていく。児童は日直の号令で起立し、自分の机を整え響き渡るくらいの声で私と朝のあいさつをかわす。その後、「朝の話」を始める。児童が好きな虫・動物、私の家庭の話、新聞からの情報などを毎日1つずつ5分程度で話すようにしている。これにより自然に話を聞く態度が養え、それを楽しみに登校する児童もでてくる。支援学級の児童がいる時は、必ずその児童がクラスにいる時間にするよう配慮しているので、「朝の話」が、5時間目になる時もある。私がうっかりしていると、「先生、まだ今日、朝の話してへん。」と声があがる。こういう時、話のしがいを感じやる気をもらえる。

② ほめる・認める

私がこうなってほしいと願う事を行動にうつしている児童を見つけ、みんなの前で認めほめるようにしている。特に、「掃除・責任・あいさつ・心づかい・整理」などの点で見つけることが多い。そうすることによって自然にみんながいい方向に向かっていく。

③ 学級通信

通信のタイトルを学級活動で決め、児童が一人ずつ順番にタイトルを書くようにしている。みんなで考える時に児童のクラスへの思いが表れ、クラスに対する意識



が深まる。そして、その通信には私の願い・学習の方法などをのせ、保護者にクラスのことがより詳しく伝わるように配慮している。また、通信は学級で必ず読んでから持ち帰るようにすると、児童にも私の考えが伝わるので効果的である。

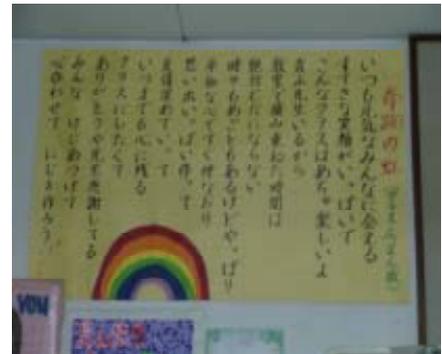
今年は、左の写真にあるように「レインボー33クラス」という名前になった。

④ 自主学習ノート

このノートにも名前をつけている。全員が一つずつ出し合いその中でしぼっていく。この名前にも、クラスへの意識が感じられ、名前をつけることによりなじみやすく、やろうとする気が出るのが不思議である。今年は、「青学ノート」に決まった。青山先生といっしょにやるノートだからという理由であった。

⑤ クラスの歌

クラスの歌は替え歌を使う。まず、替え歌に使う曲を話し合い決定する。その後、班ごとに歌詞を考えそれを再度みんなで検討し仕上げていく。この歌を作ることによりクラスへの願い・目標がはっきりし、チームワークが育っていく。今年は、「キセキ」の曲が選ばれた。タイトルも学級活動で話し合い、「奇跡の虹」となった。今年は、レインボーがいろんな場面で出てきて話し合うことの大切さをしみじみ感じる。また、歌だけでは物足りないという議題が出され、クラスのマスコットを作ることになった。「チョッパー」を工夫し、紙粘土で作ることが決まりただ今制作中である。



⑥ 誕生日・髪型

ノートに誕生日を控えておき、朝のあいさつの時と給食の牛乳による乾杯で祝うようにしている。髪型を変えた時も朝にひと声かけるようにしている。みんなとてもうれしそうで見落とさないように心がけている。

2 成果及び課題

以上のような学級経営を行って来て、児童・保護者との信頼関係がうまく築けてきている。成人になった卒業生とも姉弟妹のような関係を保っている。私を取り巻いている周り人の協力のおかげと感謝している。クラス経営にはこれでパーフェクトというものはない。これからも常に初心、感謝の心を忘れず「一期一会」を大切にしていきたい。

3 その他参考となる事項

<http://ikaruga.kir.jp>

1 実践内容

(1) はじめに

「めんどくさい」「わからへん」「そんなんしたくない」「どうするん」「これでいい？」

思ったままを声にする、さっさと自分のことだけやる、黙々と本を読む、いつも誰かを求めている等、クラス替えをし6年生になった子どもたちは落ち着かない。人間関係や自分の居場所にとっても敏感になっている。

一人ひとりの個性がお互いに学び合える感性であると考えられるので、恐れずに充分に友だちとふれ合い、さまざまなぶつかり合いを大切にしながら集団の中で磨かれる体験をしてほしい。友だちとかかわることは、ときには嫌なことや面倒なこと、がまんしなければならないことがあるけれど、いっしょに過ごすことはやっぱり楽しい、そう思える学級集団をめざしてスタート。



(2) 具体的な取り組み

〈 心の居場所 〉 大半を過ごす学校が居心地のよい場所であるために

① お互いをよく知ることから始めよう

子どもたちがペアやグループで考えたり、お互いの考えを肯定するようなかわりの機会をもつために構成的グループエンカウンターの手法を取り入れた。

- ・ 「 ○○といえば 」 ……お互いのことを知っているようで案外知らなかった。
- ・ 「好きな○○は 」 ……リーダーが生まれたり、あいづちや拍手、握手もあり、お互いが伝えやすい雰囲気になった。
- ・ 「 あなたはだあれ 」 ……参観日に行った。

自分と友だちとの共通点やちがいをあたたかい心で受けとめ、お互いにもっと関わり合えるタネを探す時間になった。保護者の方にも子どもたちの様子や個性を知っていただける機会になった。

② ふれ合うことで心を育てよう

子どもたちどうしのかかわりは、共に育っていくための重要な要素である。行事等を「チャンス」ととらえ学級作りに生かしていこうと心がけた。

- ・ 1年生のクラスへ給食当番 「かわいいなあ、1年生」
→ 6年生として自覚するチャンス
- ・ 遠足でグループ活動 「いっしょに」
→ 友だちを知るチャンス
- ・ みんなで楽しく遊ぼう会 「縦割り班編成会議はまかせて」
→ 自分を高めるチャンス
- ・ ドッジボール大会 「苦手な人もいるから練習しよう、昼休み運動場へ集合」
→ ふれ合い、ぶつかり合うチャンス
- ・ フランスから来たJ君との出会い 「ちがうこと・同じこと」

→ ちがいを認め受け入れるチャンス

2 成果及び課題

「わかったー」「やってみる」「がんばりー」「これでいいの?」「いっしょにしよう」子どもたちどうしの会話が聞こえてくる。生活の大半を過ごす学校で時には厳しく、



ときにはじっくり毎日毎日誰かとかかわり、ふれ合いドラマを繰り広げている。どの子どもにとっても居心地のよい場所であることが理想ではあるが、現実には、大なり小なり心理的な圧力や孤独、不安や不満を感じ気分が落ち込むことも経験している。そんなとき友だちの一言が心に響き自分を成長させる礎になる。

1学期末の「がんばっていたよ」のアンケートにはクラス全員の名前があり認めたり認められたりの関係ができてきているようである。何気ない保護者との会話の中にも我が子だけでなく子どもたちのがんばりを見つめてくださっているのが伝わってくる。

安心して過ごせ、共に達成感が味わえるように、学習面でも生活面でも子どもたちの心に響く言葉がけを意識したい。言葉は心を運ぶと思うので、自尊心をくすぐるような言葉のシャワーをあげて、居心地のよい雰囲気づくりを心がけながら過ごす日々の営みが大切であると考えている。

「子どもが変わることを支援する」という発想に立ち、日々のつぶやきに寄り添いながらあたたかく、しっとりしたまとまりをもつ学級を目指して取り組んでいきたい。



3 参考文献

構成的グループエンカウンター ミニエクササイズ56選小学校版 明治図書出版
斑鳩町立斑鳩西小学校ホームページ <http://www4.kcn.ne.jp/~ikarugaw/>

1 実践内容

児童の「言葉の力」の育成を目指して、国語科に限らず教育活動の様々な場面で試行錯誤しながら実践してきた。言葉の力は、一朝一夕では身に付かず、毎日の生活の中で継続的に積み重ねてこそ育成されていくものだと考えるからである。

そのためには、児童の発達段階や実態に応じ、「習得」と「活用」の過程を見通した指導計画を創造することが大切である。以下は、基礎的・基本的な知識や技能を確実に「習得」し、生活の様々な場面に「活用」することのできる力を身に付けさせることを目指して実践してきた概要である。



(1) 音読や動作化を通して、言葉をかめながら想像豊かに読み深める（低学年）

場面ごとにワークシートを用意し、登場人物の心情が表れている叙述に線を引かせた。そして、読み取った内容を基にその部分をどのように読みたいか、読み方を書かせることで、読み取った内容を音読表現に結び付けさせた。

想像豊かに読み進めていけるように、学習場面によって、多様な音読方法（一斉読み・指名読み・一人読み・役割読み・グループ読みなど）を使い分けたり、動作化やミニ劇化などを取り入れたりし、言葉をかめながら楽しく読み深めることを目指した。

また、学習前と学習後に、音読の様子をビデオ撮影し、比べながら視聴することで、音読の変容を個々に感じさせ、音読の楽しさやおもしろさを味わわせることをねらった。

(2) 根拠を明確にして自分の考えや思いを伝える（高学年）

説得力のある「平和への思い」を書いて伝えるためには、そう思う根拠を明確にする必要があるということを、新聞の投稿記事をモデル文として扱うことで実感させた。

戦争や平和に関する新聞記事内容について、事実と筆者の考え・意見に区別して線を引き、要旨をまとめることのできるワークシートを作成した。筆者の考え・意見に説得力をもたせるためには、根拠を示すことが必要であることに気付かせていった。

また、その記事に対する自分の意見や考えを書かせることで、後の学習活動である「平和への思い」を書くためのステップとした。

(3) 複数の資料から必要な情報を的確にとらえ、効果的に読む（高学年）

ニュース原稿を書く活動において、取材収集した複数の資料（新聞記事・インターネット資料・書籍など）から、必要な情報を的確にとらえたり、資料を根拠として比較・推論して読み、事実を分かりやすく伝えたりする力の深化を目指した。

そのために、社会科で既習の資料を用いて、資料から読み取るべき情報を取り出したり、意見や感想をもつ練習を行った。(右ワークシート参照)

また、根拠を提示しながら事実と感想、意見などを区別して書くことができるよう、ワークシートを工夫した。

必要な情報を正確にとらえて発信しよう
ニュースを伝えよう②

五年(一)組
名前()

資料から読み取った「事実」

国内生産は、上がったり下がったりをくりかえしている。
輸入はずっと上がってきた。2000年まで下がってきた。
消費量は2000年まで上がってきた。06年で、急げきに下がった。

「事実」に対する意見・感想

2001年9月22日
BSEといふ病気が牛にかんせんしたせいで、輸入や生産量が急げきにへって来たから。

新しい意見・感想

2000年から輸入がなげ急げきに減ったのは、BSEが問題になって、牛を食べる人が減ったから。

資料 社会科資料集 P37
① 国内牛の生産量と輸入量の変化
② ニュースデスク

2 成果及び課題

- (1) 多様な音読方法を取り入れ、音読活動を繰り返し位置づけることで、音読を苦手とする児童も、友達の声を聞くことから、語や文としてのまとまりをつかんで読めるようになった。すらすらと読めるようになるにつれ、楽しんで音読するようになり、楽しいから、さらに音読を工夫していくという相乗効果も見られた。

また、音読や動作化・ミニ劇化を友達と見合うことで、互いの読みの気付きを交流することができ、言葉をより確かめ合いながら楽しく読み味わうことにつながった。

この学習で習得した力を、本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読む際に活用していくことができた。

- (2) 戦争や平和に関する新聞記事を読み、事実や考え・意見を区別しながら読み取る学習活動を繰り返し行ったことにより、目的や意図をもちながら文章を読んだり、文末表現に気を付けながら事実や考え・意見を区別して読み分けたりする力を高めることができた。

また、説得力のある文章を書くためには、根拠を明確に示すことが大切であると実感させることができた。今後、本実践で身に付けた力を他教科や日常生活においても活用できる場面を設定していき、定着させていきたい。

- (3) 読み取らなければならない情報を明確にし、読み取ったことを整理できるワークシートを用いることは、読み取ることが苦手な児童にとっての手立てとなった。

この学習で習得した力を、自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用する際に活用できると考える。事実から自分の意見や感想をもちにくい児童が多かったので、今後の課題として、日頃からいろいろな資料に出合わせ、読み取った情報を自らの知識や経験と結び付けて考えさせる機会を多くもっていきたい。

3 その他参考となる事項

平成18～21年度 奈良県国語教育研究会研究紀要

1 実践内容

算数教育において、授業や家庭学習でも使えるソフトウェアを作成・公開し、教育用プログラミング言語 LOGO（ロゴ）を授業等で効果的に用いることで、児童の学習意欲を高め、より深い理解につなげた。



(1) 算数授業で使えるソフトウェアの開発とインターネットでの公開

これまでに、算数授業ですぐに使えるソフトウェアを80本以上開発し、インターネットで公開している。コンピュータは、瞬時のシミュレーションや正誤の判断ができ、繰り返しややり直しが容易である。教科書と黒板だけでなく、コンピュータを効果的に使い、児童の学習意欲を高め、理解を深めてきた。これらのソフトウェアは、インターネット閲覧ソフトだけで利用でき、インターネットに接続していない環境でもダウンロードして使用できる。

これらの作成にあたっては、実際に授業でソフトウェアを使った児童の反応や、算数教育の専門家の意見を参考に改良を重ねている。そうすることで、多くの先生に利用してもらえるようになってきた。また、児童が家庭でソフトウェアを使い、「家でもやってみて、おもしろかった」「計算練習に挑戦して、記録を更新した」「家の人といっしょに算数の話をした」などの感想を聞かせてくれた。

① 学習用時計

新学習指導要領の移行に伴い、今年度は低学年の複数の学年で「時刻や時間」を扱うため、アナログ時計とデジタル時計、時刻を表示した数直線上の矢印が連動して動く学習用時計のソフトウェア（図1）を開発し、授業で使った。



図 1

② かけ算、わり算の筆算

かけられる数、かける数、わられる数、わる数が大きくても、筆算の計算過程が表示され、答えが表示できるため、児童が意欲的に取り組めた。

(2) 教育用プログラミング言語LOGO（ロゴ）を算数の授業で効果的に使う

LOGOによるプログラミングを算数の授業に取り入れることを、20年以上続けている。コンピュータのプログラミングは「難しい」というイメージがあるが、教育用プログラミング言語LOGOによるプログラミングは初心者でも取り組みやすい。特に、スクラッチ（SCRATCH）というフリーソフトがブロックを並べるようにプログラミングでき、親しみやすい。プログラミングの過程は、「自分がコンピュータに教える」ことで、算数や数学の重要な概念について深く学べる。また、プログラムの間違いに気づき修正する過程で、アルゴリズム（考え方の流れ）について考え、自分の思考について振り返ること（メタ認知）ができる。



図 2

4年生で、正方形や正三角形を描くプログラム（例：図2）を児童が作成する授業をした。児童が、いろいろな描き方のプログラムを作り、みんなに説明をする中で、正三角形の性質について実感をもって理解していった。

また、「対称な図形」や「拡大・縮小した図形」を絶対座標や相対座標、変数などを利用してLOGOで描くことで、中学校からの数学の学習への接続がスムーズになる。

2 成果及び課題

いろいろな意見を取り入れて使いやすいソフトウェアを作成し、多くの学級の算数の授業に利用できた。また、大型デジタルテレビや電子黒板と併せて利用し、子どもたちの関心・意欲を高められた。家庭で、紹介したソフトウェアを利用したり、プログラムを作成したりするなど、児童が自ら学ぶ態度が育成された。

これからも、自己研鑽を積むとともに、多人数で協力して取り組み、質の高いソフトウェアの作成や、プログラミングを取り入れた授業の改善をしていきたい。

3 その他参考となる事項

<吉村HP>

<http://emyoshi.web.infoseek.co.jp>

<参考文献>

「マインド・ストーム」S.パパート著 奥村貴世子訳 未来社

「LOGOを使った算数教育カリキュラム ～子どもと作る算数～」

第23回全日本教育工学研究協議会全国大会 研究発表論文 吉村正浩

「ICTの利用活用！授業で使える！ 実践事例アイデア集」日本教育工学振興会

Vol. 14 P.68 算数 1年 みんなでつくる「いくつかな」 吉村正浩

Vol. 16 P.68 算数 1年 ながさくらベレース 吉村正浩

「個性を生かす授業と課題選択学習の展開」新算数教育研究会 編集

P.215 単位量あたりの大きさでの算数的活動は？ 吉村正浩

「スクラッチ アイデアブック ゼロから学ぶスクラッチプログラミング」

石原正雄 著 株式会社 カットシステム

「Turtle Geometry」 The Computer as a Medium for Exploring Mathematics

Harold Abelson and Andrea diSessa The MIT Press

1 実践内容

現代は、少子高齢化、地縁血縁社会の崩壊、など様々な要因が重なり合い、人々が孤立を深める「無縁社会」とよばれる状況が急速に広がっている。次代を担う児童には、自立する力とともに、人や社会とつながり共生する力、そして自分の生き方を見つめさらに高めていく向上する力などの「生きる力」が必要である。ここでは、6年生の社会科学習「わたしたちの暮らしと政治」から、問題解決的な学習を通して児童自身の生き方を見つめさせた実践の一端を報告する。



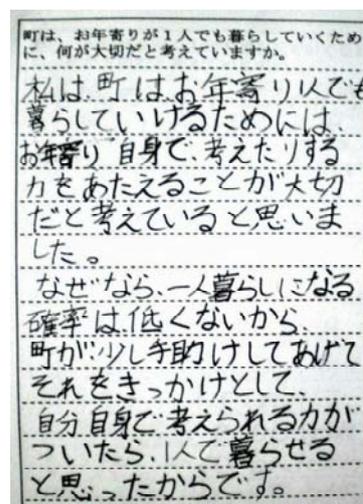
(1) 自ら調査し自ら問題を設定する。

本実践では、田原本町の高齢者福祉を通して、地方自治の仕組みをとらえていった。はじめに、高齢者の楽しみや不安、願いなどを知るために、児童一人につき10人の高齢者にアンケート調査をさせた。児童にとっては、知らない高齢者に声をかけることに戸惑いがみられたが、聞き取った高齢者から「会ったら声をかけてほしい。」「老老介護で大変だ。」「公民館学習が楽しみだ。」「一人暮らしはこわい。」「寝たきりにならないか心配だ。」など様々な思いを顔と顔を合わせて直に聞くことで、児童もそれに共感しながら調査を進めることができた。一人一人の心に「お年寄りの幸せのためにわたしたちや町は何をすればよいのだろうか」という問題意識を共有することができた。自らの調査により、高齢者の実態を初めて知った驚きと共感、問題を解決しようとする児童の意欲を支え続けた。

(2) ねり合いを通して、事象の社会的意味や人間の願いに気づく。

高齢者福祉に関する町の様々な施策の中から、特に公民館学習などの楽しみを提供する施策と、一人暮らしの高齢者のための昼食配食事業を取り上げた。

楽しみを提供する諸施策について、高齢者が自己負担して参加している事実を取り上げ「お年寄りを楽しませる取組なのに、なぜお年寄りが参加費などを払っているのか。」についてねり合わせた。このねり合いを通して、児童は、高齢者が技術の向上、世の中への貢献、仲間作りなどの目的をもって自分から進んで取組に参加しているという自立する姿と、その自立を支援する町の営みや願いに気づくことができた。



昼食配食事業では、弁当や配食における工夫などの事実を確認後、「お年寄りのことを考えたよいお弁当なのに、なぜ毎日配食しないのか」についてねり合わせた。児童は、「毎日配食を受ける受動的な生活は高齢者にとってよいことか。」という視点から考えた。そして「食の自立」と「見守り」という事業の目的と、一人暮らしの高齢者を支援する町の営みや願いに気づくことができた。

これらのねり合いを通して、高齢者の幸せは、町が何でもしてあげることで得られ

ることから、高齢者自身が自立することで得られるということへと、児童の考えが変容していった。そして、その自立を様々な面から支援することが自分や町のすべきことであるという考えに気づいていった。

(3) 学んだことをもとに新たな提案を行う。

児童はこれまでの学習をふまえ、高齢者の自立への支援という視点に立ち、自分たちや町のすべきことを考えた。そして、老老介護に対する支援と一人暮らしの高齢者に対する支援が最も必要だという結論に達し、具体的な提案書を作成していった。「学習事項」「提案」「提案の理由」「提案の実現する道筋」の4項目からなる提案書を分担してまとめた。各自が思考判断して、新たな提案を図や文で表現していった。自分たちのできることとして、この提案書に自作の高齢者ソフト食のレシピや栄養バランスの豆知識をまとめたパンフレットを添えて、アンケートで協力いただいた高齢者に配布した。そして町役場に出向き、提案書を発表して自分たちの願いを届けるという政治参加をした。

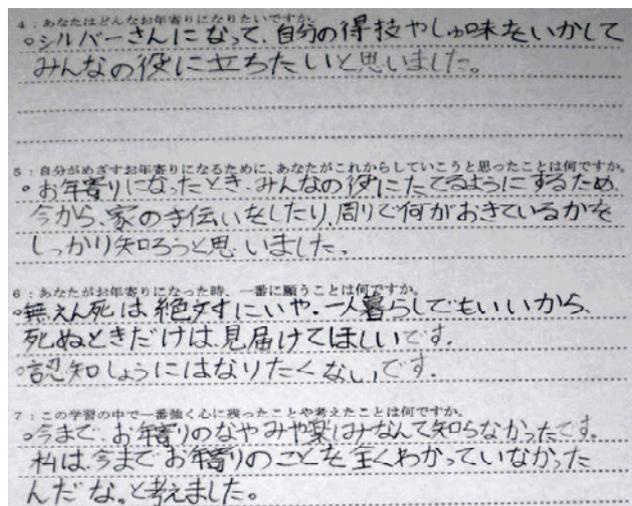
役場での提案発表では、その内容が行政でも実施に向け検討中のものもあり、よく考えているとの評価をいただいた。また、高齢者にも提案書を配布したところ、お礼の手紙をくださる方もいて、児童には励みとなった。

2 成果と課題

本実践を通して、児童は自ら調査し、問題を設定し、互いに考え合いながら自分なりの解決策を見出し、これは学習における自立であり、これからの生活上の課題においても、児童自身が主体的に解決策を見出し、自身の生活を豊かにしていくための自立する力につながったと考える。

アンケート調査で知った高齢者の願いを受けとめ、児童は自分のできることで登下校中に会える高齢者に積極的にあいさつをするようになった。児童が、高齢者とならがりをもつ大切さに気づき、あいさつとして実践できた。また、友だちとじっくり考え合うというねり合いを通して、児童は自分たちの考えを向上的に変容させることができた。その過程を通して「みんなから学ぶ」大切さや達成感も実感できたと推察できる。これらの児童の姿から共生する力が育ったと考える。

また、学習したことをもとに、シルバー人材センターを有効に活用しながら老老介護や昼食配食事業の課題を解決させるための提案を考え出し、提案書として表現することができた。また、児童は自立して生きる高齢者の生き方に共感して、自分の今後の生き方について考えた。これらの児童の姿から向上する力が育ったと考える。



1 実践内容

本校では文部科学省より「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」（平成 19・20 年度）、「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方に関する実践研究事業」

（平成 21 年度）の研究指定を受け、研究主任としてその取組を推進してきた。その具体的実践の概要は以下に示す通りである。

(1) 教員の指導力を向上させる取組

- ① 外国語活動推進部の設置
- ② 年間計画と評価規準の作成
- ③ イングリッシュルームの設置と学習環境の整備
- ④ 指導観点、指導ポイントの研修
- ⑤ 各種研修会への積極的参加と職員への環流
- ⑥ 拠点校としての授業公開実施
- ⑦ 全職員での「英語ノートCD」のリスニング
- ⑧ 英語活動アンケートの分析と検討

これらの取組を通して活動推進の方策や本校の実態に則した内容を具現化することに努めた。また、周辺校にも呼びかけ、広く教員の指導力向上に向けた先進的取組と英語活動の捉え方を相互に研修した。

(2) 具体的授業実践

これまでのALTに依存する授業から一歩進んで、学級担任が主体的に活動をマネジメントする方向で指導方法を研究してきた。指導計画や具体的な授業の組み立て方、教材の利用、何より本校における外国語活動のビジョンをALTにできる限り綿密に伝え、ALTとのより密接な連携に努めた。

特に、指導に必要な教材・教具についてもALTと協議し、積極的に開発・作成・改善を行い、指導効果を高めることができた。さらに、平成20年度には本市広報部の協力・連携のもと、姉妹都市であるオーストラリア・リズモー市の生徒たちと本校6年生とで「日本文化の紹介」として国際交流会を実現することができた。また、「ALT+担任」型と「担任単独」型の活動モデルを同一単元で公開し、今後の指導法に関するひとつの方向性を示した。

(3) その他の実践

毎週金曜日には全学年で児童が自然に英語に親しむことができるよう「エイゴリアン」のDVD放送を行ったり、本校の特色である音楽活動を生かすために、「奈良の子ども歌まつり」では英語曲を毎年発表したりしている。また、外国語活動に関する保護者の理解を得るために、授業参観においても積極的に外国語活動を採り入れることとし、中学校英語担当教員にも参観を呼びかけている。さらに、中学校の理解・協



力のもと、平成19・20年度の研究指定を受けた児童（現中学2年生）に対し、外国語活動・英語学習に関する追跡調査を行い、小学校での活動が一定の成果を得ていることを確認した。

2 成果及び課題

実際の活動を重ねる中では、「ALTとの打ち合わせが十分にできない」ということが課題となった。打ち合わせは数分から数十分しかない場合がほとんどであり、この現状の中で活動を円滑に行うには、担任が予め活動計画を明確にし、マネジメントを積極的に行うことが必要である。また、「英語ノート」を活用しながらも、その活動を中身のある充実した内容にすることが必要であると考え。我々が陥りがちな「情報過多や資源過多」は「考えない子」をつくってしまいがちであり、じっくりと考える時間、気づく時間を与えた余裕ある活動を展開することが重要であると考え。

さらに、この活動は「楽しければよい」という点にも陥りがちであり、「活動の楽しさ」を質的により高いものとするために、児童の知的好奇心をよりくすぐるような題材にしたり、文化や芸術等にも深い関心を持てるような活動の工夫をしたりすることが今後必要とされるだろう。

また、「評価」の在り方については、まずは「英語ノート指導資料」の評価規準例を参考に活動の進捗状況や態度、関心进行评估することが基本であり、観察や面接、アンケートや英語ノート、作品などを通し、児童が「観点の三本柱」のどの点で特徴的な成長をしているのか、に気づくことが大切であると分析している。

現在、本校では平成22年度奈良県小学校外国語活動実践研究の指定を受け、今年度もここ数年来で蓄積したノウハウをもとに公開授業を提供した。これは、平成21年度に発足した大和高田市小学校外国語活動研究会との相互研修としても位置づけられ、本校での具体的実践が市内周辺校に環流することができるという意味において有効であると考え。そして、本年度発足した奈良県外国語活動研究会においては、事務局研究委員長として平成23年度の本格実施に向けた円滑な導入援護とするために、研究の方向を示し、目下努めているところである。これらの研究や実践が県内各校において本当の意味で成果を発揮するのは来年度以降のことであるが、昨年度より県指導員として数校訪問する中で、各校教職員の意識の高まりや一致団結して外国語活動に取り組もうとする空気が日増しに強くなってきていると感じる。

今後、外国語活動はさまざまな形で進化し、整理されて歩みを進めていくと考えられるが、まず以て授業者がその歩みに先行した実践的研究に努めるべきであると考え。従って、現状に甘んじることなく、今後も活動内容の充実、質的向上に向けた実践的研究を校内外で推し進めていきたいと考える。



3 その他参考となる事項

大和高田市立高田小学校HP <http://web1.kcn.jp/takada-es/kenkyu/kenkyu.html>

1 実践内容

本校の児童は、3世代同居世帯の子どもたちが多く祖父母とのつながりも強い。また地域での家庭間のつながりや人間関係は比較的濃密な傾向がある。児童の多くは落ち着いた様子で、問題行動等も少ないが、やや積極性に欠け受動的な側面も目につく。また、家庭環境や子育ての中に課題があったり、経済的な面で問題をかかえる家庭もあり、日常の児童の生活に影響を与えているケースも見られる。



そのような地域の実態も考慮しつつ、児童の生活実態を踏まえて生徒指導を進めていくために、次の3点を重点として掲げ取組を進めることにした。

- (1) 様々な活動を通して互いの人間関係を深めていくこと。
- (2) 集団で気持ちよく生活するときのルールを大切にすること。
- (3) 基本的なあいさつや家庭での生活リズムを含めた生活習慣の育成。

本校では、少人数の学校である特色を生かしながら、互いの人間関係を深める取組として異年齢の集団活動を積極的に推進してきた。1年生から6年生の児童を縦割り10班のグループに分けて、日々の学校生活や行事での活動母体とした。低学年児童と高学年児童相互のやりとりの中で思いやりの気持ちを育んだり、上級生としてのリーダーシップを養ったりする意味で大切にしている取組である。児童数が減少し、離れた地域からのスクールバス登校ということもあって、子ども同士の関係、特に縦割りの関係が希薄になってきた。同学年同士、また異学年間の望ましい人間関係をつくる場として、学校生活の中で縦割り活動を充実させるために工夫をしてきた。高学年の児童はリーダー



〈花いっぱい運動の様子〉

シップを養い、低学年の児童は高学年児童の動きや経験から様々なことを学ぶ場として、花いっぱい運動、春の全校縦割り遠足、農園作業、林間合宿、社会科見学や月ごとの集会活動や委員会の集会などにも、この縦割りグループを単位とした活動を組み入れた。日常の活動として、昼休み終了後の全校清掃活動にも縦割り班を取り入れ、異学年間での人間関係を育てることにした。

また、1週間の学校生活にリズムを持たせ、気持ちのよい1日をスタートさせるために、月曜日から金曜日の朝タイムの時間を充実させた。始業から学級朝の会までの15分間を、「朝タイム」として位置づけそれぞれの

曜日毎に朝の活動を行っている。月曜日は「全校朝の会」で、校長講話、校歌、ラジオ体操をローテーションしながら行っている。火曜日と木曜日は「チャレンジタイム」で、算数の基礎学力を定着させるための時間として位置づけている。水曜日は「スピーチ集会」として、子どもたちが綴った日々の生活作文の発表を行い、金曜日は「誕生日集会」と「分団会」「読書」を組み合わせ朝の集会をしている。これらの朝タイムの内容を充実させることで、曜日毎のリズム感を醸成し、子どもたちの学校生活に対する前向きな姿勢を生み出すことにつながっていると考える。

集団生活を営んでいく上で必要な規範意識を育むために、月別の目標と週毎の目標を立て日々の生活を送るようにしている。月別目標は、代表委員会で学級から意見を持ち寄って決め、週別目標は職員の週当番と児童の週当番で、月目標に基づいた内容を相談しながら決めている。週目標は週委員の児童が全校児童に連絡して、週初めの「全校集会」で「先週の反省」として児童の手でチェックをし、次の目標の設定につなげている。

2 成果及び課題

地域では崩壊している縦割りの集団を、学校で作っていくことによって、互いの立場を意識しながらの行動や言葉がけもふえてきた。リーダー的存在として、あるいは大切な集団の一メンバーとして、子ども同士がいつも自分の立場を振り返っていくことができるようになりつつある。また、毎日の朝タイムの取組みは生活のリズム感を醸成し、規則正しい学校生活を送っていくことの土台となってきた。できるだけたくさんの児童が、活躍したり周囲から認められたりする場面を作ろうと取り組んできた。リーダー的な立場の児童が、集会進行役の場数をふむことで自信を持って活動できるようになったり、自己表現の苦手な児童が、スピーチ集会への準備・本番を通してしっかり自分の思いを出せるようになったりという事例も多く見られるようになった。児童間の会話の中にも、規範意識に基づいたやりとりや会話も徐々に見受けられるようになってきた。

しかし、少人数で一人一人に目が行き届くことによって、子どもたちが受け身の姿勢になることもあり、積極性や発想を大切にしながら関わっていく必要がある。児童の生活の様子や、生徒指導についての共通認識を持つ場と時間の不足も課題としてあげられる。また3世代同居で、祖父母からいろいろな面で子育てに関するノウハウや協力を得ている家庭も多い反面、子育てに対して不安を抱えながら日々子どもと接している保護者も増えてきている。基本的な食、就寝、学習習慣などといった生活習慣の確立も、家庭と積極的に連携を取りつつ進めていく必要があると考えている。

1 実践内容

人として生まれてきたからには、これからも人として生きていかなければならない。そのためには、人としての基礎・基本を学ぶ小学校の時期に人としての大切な心をはぐくんでいく必要があると考え、道德教育を核にした取組を進めてきた。



(1) 当たり前のことを当たり前

① まずはあいさつから

みんなが気持ちよく生活できる学校にするためにはどうすればよいかを考えさせる中で、人としての基本はまずあいさつにあるということに気付かせ、実践につなげていった。また、先生方やPTA役員にも協力をお願いして、委員会児童とともに日々の校門立哨活動に取り組み、笑顔であいさつできる児童の育成に努めてきた。

② あかんことはあかん

人の体や心を傷つけたり、多くの人に迷惑をかけたりすることは、人として許されるものではない。そうした行動については毅然とした態度で対処するとともに、本人にも理由を説明し納得させることで自律の心を育ててきた。また、指導に当たっては、「温かいけど甘くない、厳しいけど冷たくない、対応は多様だけど不公平ではない」を全教職員の合言葉とした。

(2) 学校は学ぶところだ

① できる喜びややる気をはぐくむ学習活動

「分からない」「できない」「おもしろくない」「やる気がない」という学習上の悪循環と子どもたちの心は無関係ではない。「分かる」「できる」「楽しい」「もっとやりたい」と思える学習にするために、基礎・基本の時間の取組や日頃の学習活動を見直し、改善に努めてきた。また、「できたやん。」「がんばったやん。」「あともうちょっとやん。」といった友達同士の声かけができる学級作りに取り組んだ。

② 体験活動等を生かした道德の時間の充実

個々それぞれに行われる日常体験を生かし、学校教育における意図的、計画的な体験活動との関連を図り、模擬体験や追体験等の体験的な活動を取り入れながら、子どもたちの心に響く道德の時間を大切にしてきた。

・ 実践例 道德「くもの糸」 高1-(1)

周りのことをあまり考えずに自分さえよければと考えて勝手な行動をしたり、失敗したときには人のせいにしてたり…。一度ならずそんな経験をしている子ども



は多い。そうした自分自身の体験と重ね合わせながら、主人公のカンダタの思いを考えることで、常に自分を反省するとともに、思慮深く節度ある生活をしようとする態度を養おうとした。子どもたちの意識の流れを明確にし、道德的価値の自覚を深めるために、板書を工夫することにも力を入れてきた。

③ 全校集会

子どもたちの規範意識を高め、よりよい人間として生きていこうとする態度を育てるために全校集会を実施した。先生だけでなく子ども自らも、日ごろの生活の中から気付いたことを語ることによって、



一人一人が主体的に生活を見直す機会とした。道徳の時間の指導内容4つの視点にかかわった次のような話もし、人として生きていることの意味を考えさせた。

- ・ 人は、自分のまちがいに気付き、それを直すことができる。
- ・ 人は、相手のことを思いやり、相手の立場に立って考えることができる。
- ・ 人は、自分や人の命、周りの自然を大切にすることができる。
- ・ 人は、だれもが気持ちよく生活するために、約束やきまりを守ることができる。

(3) 先生も変わらなきや

子どもたちの道徳的価値の自覚を高め、道徳的実践力を育てるためには、まず教員自身が物事に深く感動し、その感動を熱く語れる人間にならないといけない。そのためには、例年通りという意識から脱却し、常に向上心をもって日々研修を積み重ねることが大切である。また、一度やってみてダメだったら、新たな方策を考える柔軟性をもつことも大切である。会議や研修の場を通して、子どもを変えるためには先生も変わらなければならないということを語り合い、共通理解を図ってきた。

(4) 「子どものために」で一致して

様々な価値観をもつ保護者との連携はなかなか難しいが、「すべては子どものために」という1点で一致できると考え、連絡帳の活用や家庭訪問、学級懇談会や講演会の実施、学年通信や学校通信による情報交流等を行い、理解と協力を求めてきた。

2 成果及び課題

人として生きていくためには、人として大切にしなければならないものがある。道徳教育を核にした日々の積み重ねは、少しずつではあるが、子どもの心にそうした思いを着実に根付かせているように思う。あいさつの声に張りがもどり、当たり前のことを当たり前に行おうとする姿勢や日々の活動に意欲的に取り組もうとする姿も見えてきた。最初のころは叱責の言葉が多かった教職員の声も、最近では子どもたちの頑張りを認め励ます声に変わってきつつある。

今後も、保護者や地域との連携を深めながら、学校教育全体の中で道徳教育を押し進めるとともに、道徳の時間の充実を図ることで道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を培っていききたい。そして、将来への夢や希望をもって目の前の乗り越えなければならない線の一つ一つしっかり乗り越えていける子どもたち、自律の心をもって乗り越えてはならない線の一步手前でしっかり踏みとどまれる子どもたちを育てていきたい。

3 その他参考となる事項

道徳副読本 「生きる力」 6年 (日本文教出版)

五條市立五條小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/gosho>



1 実践内容

学級活動の話合い活動は、お互いの意見を尊重しながら人間らしく生きていくための創造的な活動である。また、一つしかない答えをみんなで探すのではなく、いろいろな意見や考え方の中から、自分も相手もよいと認められるものを考え出すことで、集団としての高まりやよりよい人間関係をつくり上げていく活動である。しかし、これまでの子どもたちの話合い活動では、見通しがもてずに単調な話合いになったり、議題に切実感がなく活発な意見交流にならなかつたりする傾向が見られた。このような課題を克服するため、個に応じた指導や計画委員会のもち方、自己評価について研究を進めることにした。

(1) 個に応じた指導の工夫

① 評価規準の作成

学級活動の評価は、活動の成果よりも活動の過程を重視し、培った自主性や実践力が学級活動はもちろんのこと、教育活動に生かされるよう、個々の児童のよさを積極的に認めるものが望まれる。そのためには、子どもの力を見取るための評価規準の作成が必要になる。

今までの評価については、全学年一貫した評価規準がなかったため、系統的な評価ができにくくなっていた。そこで、特別活動や学級活動のねらい、子どもたちの実態を踏まえ、評価規準を作成した。

② 個々の子どもの見取り

子どもたちの自主的な活動を引き出すためには、子ども一人一人が話合い活動に前向きに臨む姿勢や自分を振り返ることが大切になる。そこで、個人カードを作成し、学級全体のめあてに対する自分のめあてを立てさせたり、話合いの柱に対する意見を前もって書かせたりした。また、話合いのあと自分の感想や振り返りをさせたりした。

(2) 見通しをもった話合いを進めるための計画委員会の充実

話合い活動で重要なことは、計画委員会での見通しをもった事前の話合いをうまく進めることができるかどうかのポイントになると考える。しかし、子どもたちは、計画委員会での話合いを十分にもたないまま、学級会に臨んだり、学級会後の反省を十分にしなかつたりしていた。

このような実態は、指導者があまり計画委員会を重視してこなかったところに原因があると考えられる。そこで、子どもたちが計画委員会の活動を見通しをもって自発的に進めていけるように、以下のようないくつかの手立てを指導者が考え実践した。

① 議題選定への支援や話合いの柱の明確化

ある程度、議題箱に子どもたちからの議題が入らないと議題を決めるのに困る。議題箱を置いておくだけでは、なかなか集まらない。そこで、日直が朝の会や帰り

の会にみんなに呼びかけをした。最初のうちは、あまり効果はなかったものの、呼びかけを続けることで、だんだんと集まりだした。このことにより、計画委員会の子たちも意欲的に議題選定の作業に取り組んだ。その後、議題は集まるものの、議題選定について十分な話し合いができなかったり、議題選定の判断基準が明確でなかったりして、学級会での話し合いがうまく進める

第 (10) 回学級会計画書 (11) 月 (25) 日 (金) 曜日 提案者 〇〇	
議題	卒業に向けてタイムカプセルを作ろう
提案理由	「卒業に向けてタイムカプセルを作ろう」というテーマで、友達と話し合おう。そして卒業してからみんなの心に残る思い出を作りたいから。
学級全体のめあて	卒業に向けてタイムカプセルを作ろう
役割	司会 〇〇 副司会 〇〇 黒板記録 〇〇 ノート記録 〇〇
話し合いの順序	1 話し合いのめあて 2 役割の紹介 3 議題の確認 4 提案理由の確認 5 卒業のめあて 6 話し合うことの確認 7 決まっていることの確認 8 話し合い 9 今日の感想 10 先生の話 11 おわりの言葉
予想される意見	1 1つのお題で話し合おう。 2 卒業の日・卒業式の日(3月20日) 3 卒業理由の確認 4 「卒業」の意味 5 「卒業」の意味 6 「卒業」の意味 7 「卒業」の意味 8 「卒業」の意味 9 「卒業」の意味 10 「卒業」の意味 11 「卒業」の意味
黒板記録	気をつけること
ふりかえり	
計画が予定の通り進んだ	○ ○ △ ×
話し合いがうまく進んだ	○ ○ △ ×
話し合いがうまく進まなかった	○ ○ △ ×
本番に向けてみんなに提案ができた	○ ○ △ ×
ここがよかった、こうしたらもっとよい	

ことができにくかった。また、提案理由や話し合いの柱が不明確なまま、本番の学級会に臨んでしまった結果、時間内にうまく話し合いがまとまらなかった。

そこで、議題選定の基準を設け、子どもたちに判断しやすいようにさせた。また、提案理由や話し合いの柱が明確化できるよう、たえず提案理由を明確にしたり、多様な予想される意見をもたせたりして、計画委員会で十分に話し合いをした。

(3) 自己評価を活用した主体的な活動の充実

指導者が集団や個人の指導に生かす評価を進めることが大切であることは言うまでもなく、子どもたち自身が話し合いの自己評価をすることは、学級全体のめあてや自分のめあてを反省することができる。さらに、次への意欲付けにつながると考える。

そこで、個人カードと計画委員会ノートを使って活動の充実を図った。

2 成果と課題

(1) 計画委員会ノートや個人カードを使用することで、一人ひとりの児童が議題に対して、十分な準備と自分の意見をもって話し合いに臨むことができた。見通しをもって話し合い活動を進めることができ、子どもたちの自信につながった。「次の学級会にはこんなことに気をつけて話し合いを進めてみよう。」などのつぶやきも聞かれるようになった。

(2) 個人の反省、司会団の反省をすることで、次へのステップにつなげることができた。今まであまり意識せずに話し合い活動をしてきた子どもたちが話し合いの振り返りをする中で、自分や集団のよさに目を向け、よりよい話し合い活動にしようとする意識が高まった。

本研究の成果として、話し合い活動にも少しずつ高まりが感じられるようになってきた。さらに、自分の思いや考えを自分の言葉で表現し、友達のよさを認め合う話し合い活動を充実していきたい。

3 その他参考となる事項

奈良市立六郷小学校ホームページ：

<http://www.naracity.ed.jp/rikugou-e/>

第 (10) 回学級会の計画 (11) 月 (25) 日 記録 (S 4)	
議題	卒業に向けて タイムカプセルを作ろう
提案理由	今よりもっと学級がまとまるように、そして卒業してからみんなの心に残る思い出を作りたいから。
係	・司会 (S 1) ・副司会 (S 2) ・黒板記録 (S 3) ・ノート記録 (S 4)
話し合いのめあて	友達の意見をしっかり聞き、進んで自分の考えを発表しよう。
①はじめの言葉 ②役割の紹介 ③議題の確認 ④提案理由の説明 ⑤話し合いのめあての確認 ⑥話し合うことの確認 ⑦決まっていることの確認 ⑧話し合い	
決まっていること	入れるもの (4種類) 埋める日 (3月20日) 埋める場所 (先生一任)
話し合いの順序	時間 予 想 さ れ る 意 見 準備・役割等
①何を入れるか	15分 ・将来の夢・工作・大切なもの・絵・写真 ・録音テープ・手紙 たんざく
②いつあげるか	10分 ・中学校卒業の日・20歳・30歳
③役割について	10分
名前のマグネット	
⑨決まったことの発表 ⑩先生の話 ⑪終わりの言葉	

1 実践内容

(1) はじめに

児童は学校において様々な活動を試みているが、その中で、他の児童や教職員、保護者等に認められたり評価されたりすることによって自信を深めたり、新たな活動への意欲につながったりすることがしばしば見られる。

特に高学年児童では、行事を通して自主性・主体性が育つ場面もよくあり、効果的な環境設定や周囲からの働きかけが、よりよい成長を促すものと思われる。

本実践は、主に高学年児童の学校行事や学級行事、児童会活動を通して指導を試み、子どもたちが生き生きと活動できた事例について報告するものである。



(2) 実践事例

① 運動会を通して

本校は全校単学級の小規模校のため、高学年児童には一人一役で、スピーチや、ダンス、演奏など、大勢から注目される場を与えることが可能である。そこで下記のような役割を持たせ、運動会という大きな行事に臨ませるようにしている。

- i 児童代表・応援団
- ii 全校ダンス創作係
- iii 高学年演技（組立体操）係
- iv 開会式入場行進音楽隊
- v 団体競技計画準備係

秋の運動会に向けては6月頃から役割を分担して準備を始め、1学期段階でおおよその計画を整えるようにし、2学期に入るとすぐ本格的な活動を始める。時間を確保するため、休み時間にそれぞれの活動を進めることも多いが「自らの手で創造する運動会」を合い言葉に子どもたちの自主性を促している。



当日に至るまでの間には、学級通信で児童の様子を家庭に知らせたり、下級生の前でお披露目会をしたりするなど、周りから賞賛されたり、評価される場面を意図的に作り意欲を高めるようにしている。

運動会后、保護者から高く評価してもらえることも多く、児童にとって貴重な経験となるようである。

② 卒業前の学級活動を通して

6年生では卒業前に「お世話になった方に感謝の気持ちを送ろう」という議題を

作り、班ごとに計画を進めるようにした。その具体的なプランは次の様である。

- i 交通ボランティアの方に交通安全マスコットを贈る
- ii 給食センターの調理員さんにメッセージビデオを贈る
- iii 地域の長寿会（敬老会）の方に手紙を贈る
- iv 保護者を招いて茶話会を開く
- v 本校の先生一人一人に感謝の言葉を贈る
- vi 転勤された先生に寄せ書きを贈る
- vii 下級生に自作のお手玉を贈る

学級会でそれぞれの班から提案をし、それについて質疑応答、検討を加え、決定したものについては一人一役の担当を決め、メッセージを送る場面も設定した。贈り物をする場合は、全校朝礼、給食センター配送車の来る時間、6年生を送る会、授業参観など、既存の行事や機会を利用し、直接相手に感謝の言葉を伝えるようにした。

③ その他

修学旅行、児童会のボランティア活動、あいさつ運動など、学校行事や児童会活動など、子ども達が大勢の前で活躍できる場はたくさんあり、それぞれにおいても一人ひとりが大勢の前に出て活動できる場と、それについての評価が与えられるようにしている。

2 成果と課題

- ・ 自分の行動が、周りから賞賛を得ることにつながったり、下級生から憧れの目で見られたりすることは、子どもたちの心に自信が芽生えてくるのは確かである。
- ・ 大きな行事になると、緊張感や不安を感じる児童も少なくない。しかし、児童相互の励まし合い、支え合い、また教師からの支援などで、それを越えた時に感じる満足感はその信頼関係につながっていく面も多く見られる。中にはやり遂げたことに感動し涙ぐむ児童も見られている。
- ・ 地域とつながっていくことは、子どもたちが「自分一人で生きているのではない」ということを再認識し、社会の中で生きる自分を発見するきっかけになると思われる。感謝の気持ちを相手に伝えた時に返ってくる相手の笑顔や温かい言葉が、子どもたちの心にそのことを深く刻むようである。
- ・ 課題としては、活動や計画・準備の時間の確保が難しく、担任一人ではどうしても十分な支援ができきれない面もあり、他の教師との連携や協力が必要となる。学級独自の活動として独りよがりにならず、学校教育活動全体を見渡し、計画を進めていくことが重要な点であると考えている。

1 実践内容

平成20年度に実施した「全国学力・学習状況調査」から明らかになったことは、「基本的な生活習慣の確立がされていない」「低学力傾向」「規範意識が低い」「家庭学習の習慣化がなされていない」「コミュニケーション能力が身につけていない」などである。

それまでは、経験年数の短い若手教員が多いため、低学力傾向であるとわかっていても「なにを」「どのように」しなければならないのかまでは考えていなかった。

しかし、調査結果から本校の課題が見えてきた現実を見定め、教務主任として人権教育推進教員として本校の課題を明らかにして、学力向上に取り組んできた。



(1) 「大正プラン」～いいスタートを切るために～

本校では、毎年新任の先生、講師の先生が多く着任してくるので、新年度の始業式前に必ずこの研修を実施している。目的は、子ども・保護者・地域の実態について知ってもらうことと、学級づくりをしていく上で「始業式」「スタートしてからの10日間」が大切であることを伝えることである。また、教務主任として模擬授業を提示し、どの学級でも子どもたちと話し合っただけで学級目標を決め、目標に向かってスタートできるようにしている。

(2) 「人権を確かめ合う日」の取組の見直し

毎月11日を「人権を確かめ合う日」と設定し、学年、学級での取組を発表するようにしている。この取組には人推も計画・実施に関わりをもっている。学年の発表後は、全校で話し合いを持ち、発表の感想や話し合いの内容を「人権だより」や校内放送を通して全校に伝え、思いや考えをつなげていけるようにしている。

(3) 「なかまの木を育てよう」～ちくちく言葉をなくそう～

本校の児童は、自尊感情が育っていないために心に不安や悩みを抱えて学校生活を送っている。人を傷つける言動が見られたり、コミュニケーションが図れず一方的な感情で行動したりと問題行動が多く、そのたびに担任は生徒指導に追われる日々が続く。「人間関係づくりを中心とした学級指導を」と提案するが、担任は「なにを」「どのように」と悩んでいるので、研修で「なかまの木を育てよう」の模擬授業を示し、取組の方法を提案した。大正小学校から「ちくちく言葉をなくそう」を合い言葉に取組を進めている。

(4) 基礎学力の充実にむけて

基礎学力の時間として1時間目の前に20分間「朝のび」を設定し、漢字・計算・読書に取り組んでいる。さらに、総合学習の1時間も「ロングのび」として基礎学力の充実に努める。家庭学習を習慣化させるために毎日宿題を出しやりきらせる。やりきれない児童には放課後「がんばりタイム」を設定し、学習に取り組ませている。

平成20年度「全国学力・学習状況調査」や「奈良県学力テスト」より、調査結果における特徴を具体的な数値とグラフを用いて研修を持ち、大正小学校の課題は「基礎学力が低い」「学習意欲がない」「教師の指導力不足」であることが明らかになった。

県平均を国語で+9.5、算数で+1.7上回った「2年の取組から学ぶ」研修を持ち、自分の学年・学級の取組とどこがちがうのか、低学力の子どもたちとの担任の関わり、学級経営、集団づくり、しんどいことをやりきらせる粘り強さ、教師の指導力などに

ついて話し合った結果、非常に効果的であったように思える。

(5) 学期ごとの総括

学期の終わりには、個人と学年の取組の成果と課題を提出してもらい研修を持つ形を1年間通してきた。学年で話し合い、ふりかえる時間を確保したことで、どれだけ計画にそって取り組めたか、なぜ取り組めなかったのかを検証することができた。全体で総括したことで、次の計画へとつなげることができた。

2 成果及び課題

「確かな学力」は、学級集団ができていの中で身につくものであり、子ども同士の支え合う関係が重要である。本校には経験の短い教員が多い。その教員が理解できるようにていねいに指導案や模擬授業を提示しながら、共通理解、全体化をはかっている。学期ごとの取組を検証し、課題を見つけ、次学期へつなげていくサイクルを続けながら、若い教員が、今どんなことで悩み困っているのかをキャッチし、サポートしていける教職員の支え合う関係もできつつある。しんどい思いをしている子どもがいないか、いつもアンテナをはりながら教職員全員が危機感を持ち、子どもと向き合っていきたい。

「大正小学校が好き」と言える学校をめざしていきたい。

3 その他参考となる事項

- 2007年度 研究のまとめ 御所市立大正小学校
- 2008年度 研究のまとめ 御所市立大正小学校
- 2009年度 研究のまとめ 御所市立大正小学校



なかまづくり集会
人権集会「ないたあかおに」

第(10)回学級会の計画 (11)月(25)日 記録(S4)			
議題	卒業に向けて タイムカプセルを作ろう		
提案理由	今よりもっと学級がまとまるように、そして卒業してからみんなの心に残る思い出を作りたいから。		
係	司会(S1)・副司会(S2)・黒板記録(S3)・ノート記録(S4)		
話し合いのめあて	友達の見え方をしっかり聞き、進んで自分の考えを発表しよう。		
	①はじめの言葉 ②役割の紹介 ③議題の確認 ④提案理由の説明 ⑤話し合いのめあての確認 ⑥話し合うことの確認 ⑦決まっていることの確認 ⑧話し合い		
決まっていること	入れるもの(4種類)	埋める日(3月20日)	埋める場所(先生一任)
話し合いの順序	時間	予想される意見	準備・役割等
①何を入れるか。	15分	・将来の夢・工作・大切なもの・絵・写真 ・録音テープ・手紙	たんざく
②いつあけるか。	10分	・中学校卒業の日・20歳・30歳	
③役割について	10分		名前のマグネット
⑨決まったことの発表 ⑩先生の話 ⑪終わりの言葉			

1 実践内容

「人との出会い」を大切にする人権・生活総合学習により、子どもたちはその「人」の生き様や地域社会に学び、まわりの人や地域社会へ働きかける学習活動を主体的に行うことができる。主体的な学習から行動をおこすことで、地域や地域の人との交流が生まれる。そんな交流を通して、地域の一員としての自分を発見し、地域を見つめる目が育つ。また、聞き取り学習や体験学習、調査活動、まとめ発信していく学習を通して、「もの」「こと」への関心のよせ方や、ものごとを見る視点も育ち、「人」「もの」「こと」との「出会いなおし」をすることができる。と考え、実践を積み重ねてきた。



(1) 「ともだち大すき」(2007年度1年生)

友だちとの出会いやふれあいを大切にしながら、様々な遊びを経験させ、「友だちといっしょにいると楽しいな。」「隣りにいる友だちにやさしくしたいな。」と実感できる活動を組み立てた。地域の高齢者やお手玉名人、お話の会の方々に支えてもらいながら、伝承遊びや香芝の民話に親しみ、竹ひごづくりなどにも挑戦した。また、獣医師の方々と出会い、自分や動物の心音を聞いたり体に触れたりしながら「命」を体感した。こうして、相手の気持ちが想像できるようになった。

(2) 「汗かき名人をさがせ」(2008年度2年生)

自分たちの生活を支えている人(調理員さんや新聞配達、郵便集配、産婦人科医、精肉店など様々なお店に携わる方々)と出会い、その働く姿から、働きがいや喜び、しんどさを学んだ。特に、「なき声以外はむだにしない」お肉屋さんの働く姿を見学し、その技術の素晴らしさに目を見張り、その仕事に対する誇りを2年生なりに体感することができた。また、仕事を通して自分たちの暮らしを支えている親の姿にも目を向けた。こうして、低学年の生活科を中心とした取組みの中で部落問題学習へのアプローチを試みた。

(3) 「人と人とのつながりいっぱい」(2004年度3年生)

「障がい」をもつ人や地域に根ざしたネットワーク作りを大切にしながら高齢者や子どもたちの生き生きとした暮らしをサポートしている人に出会い、人のぬくもりや人とのつながりのよさ・すてきさに気づくことができた。また、地域の暮らしの中に息づいている「確かなもの」と出会うことで、自分たちもこの町で生活する一員として、地域の人々とふれあい、つながっていききたいという気持ちが高まり、自分たちのつながり(なかま集団)をもふり返ることができた。

(4) 「匠アリ！ ～太鼓から何が見えるか～」(2009年度4年生)

<ユニットの展開>

ワーク1 くらしを見つめよう。健康な暮らしを支えるしごとを知ろう。

ワーク2 働く人『匠』に出会おう。パート1

- ◎ ごみ収集員さんのしごとぶりを見つめたり、吉野川分水を支えている人に出会ったりしながら、それぞれの仕事に対する誇りや思いを知った。

ワーク 3 全校のみんなに発信しよう。ー命かがやき集会ー

ワーク 4 五ヶ所（校区唯一の旧村）の秘密を探ろう。

ワーク 5 四季耕作図絵馬（五ヶ所の市指定文化財）について知ろう。

ワーク 6 五ヶ所の人に出会おう。

◎ 五ヶ所を探検してさまざまな「もの」に出会い、五ヶ所の古老や二上山博物館の学芸員さんから話を聞いて、自分たちがくらす地域を見つめなおした。

ワーク 7 働く人『匠』に出会おう。パート 2

ワーク 8 みんなに発信しよう。調べたことや体験したことを伝え合おう。

◎ 7つの伝統産業・地場産業のグループ（グローブ、奈良墨、奈良筆、茶せん、赤膚焼き、和紙、和太鼓）に分かれ、それぞれの原料・材料や生産工程、歴史などを視聴覚教材やインターネットで調べた後、社会見学などで実際に『匠』と出会った。グローブ作りでは、5 mmの皮ひもをはさみながら 2枚の皮を立体的にミシンがけする技を目の当たりにし「さすが『匠』や。」という声。奈良墨では、千数百年も受け継がれてきたこの技を、自分が担い手として受け継ごうとする『匠』の強い思いなどを知った。紙漉きの体験学習では、『匠』の技術のすばらしさを五感を通して感じ、『匠』のこだわりや、なぜこの仕事を選んだのかなどを知り、仕事労働に対する意識を高めた。また、牛の皮を体感しながら自分の和太鼓を作って演奏し、それぞれの『匠』が「命」を生かし、肌で「自然」を感じながら「ものづくり」されていることを発信した。

ワーク 9 グローブづくりの『匠』や先人の生きざまに学ぼう。

◎ ムラのあたたかさやぬくもり、差別とたたかってきた人々の姿や思いを知り、差別や偏見の不合理性に怒りをもった。と同時に自分の生き方をふり返った。

ワーク 10 自分のことを見つめ直そう

ワーク 11 二分の一成人式をしよう

◎ 自分で漉いた和紙に自分が大切にしたい文字を一文字書き、その文字に対する思いや願い、夢などを、このユニットで出会った『匠』に学びながら、作文にまとめて発表した。

2 成果及び課題

ムラとの「豊かな出会い」とは、被差別の立場を生きる人々が差別と闘い差別をなくしていくためにがんばっていることに気づき、子どもたちが差別をなくしていく生き方を求めていくための出会いであると考えている。ムラの仕事を通して、製品のよさや技術のすばらしさなど「もの」を入口に、その人の人柄や生き様に感動を覚えたり共感したりする「ひと」との出会いがある。その仕事が発展してきた背景や職人の個々（集団）の生き様、その生き様に裏打ちされた人柄に共通に存在しているものに気づくと、その中に、差別の現実や差別に立ち向かってきた人々の姿をみることができる。そして、そのことと自分自身やクラスのなかまの「くらし」を重ねていくことで、部落問題認識が深まっていく。という実践に学び、これからも、校区にムラのない本校での「人との出会い」を積み上げていきたいと思う。

1 実践内容

本校の特別支援学級の児童の種別は、知的障害、自閉症・情緒障害（広汎性発達障害・アスペルガー症候群等）、肢体不自由と多種別に渡っている。また、子どもたちの様子も単一の障害だけではなく、障害を重複した状態像を示す子どもたちがほとんどである。本校の特別支援学級での指導では、子どもそれぞれが持っている課題を認知面や運動面、社会性の面から見て、総合的にアプローチできるように指導を組み立ててきた。



(1) 子どものアセスメントを基に立てた個別の指導計画

専門機関での発達検査やアセスメントの結果を得たり、校内で発達検査（WISC-Ⅲ・K-ABC・PVT-R）を行ったりして、子どもの発達の状態や認知の特徴を知り、個別の指導計画を作成している。

(2) 課題に合った指導内容の組み合わせ

- ① 自立活動：主に日常生活に関する内容・情緒の安定・コミュニケーションに関する内容・人間関係や集団参加に関する内容・遊び等を取り入れた感覚運動
- ② 基礎学力に関する内容：ことば・文字・数・量
- ③ 栽培・調理など作業に関する内容
- ④ 制作活動
- ⑤ 生活単元学習：学校の行事や季節の行事または興味関心のあるものをテーマにして組み立てた学習

(3) 指導形態の特長を生かした指導

- ① 個別指導：子どもに合った課題を、集中できる環境で、認知の特徴を生かして指導する。特に基礎学力の定着、基本的な日常生活に関する内容を中心に行う。
- ② 小集団指導：課題別の小集団と全員で行う小集団に分かれている。どちらの小集団も課題を設定して自立活動や作業、制作活動や生活単元学習を行う。特に生活単元学習では、活動や意識を連続させて行うことで、物事の連続性を意識して活動することができる。そして、役割への意識や責任感が育つ。また、多くの子どもたちが一緒に活動することで人に合わせたり待ったりするなど生活に必要な社会性を身に付け、子どもたち同士のコミュニケーション能力を伸ばすことができる。

本校で特に力を入れてきたものは、小集団指導である。小集団指導では、上記に示したように課題を多領域に渡って取り組むことができると考えている。また、小集団での活動は、個別指導や課題別小集団指導で獲得した力を発揮できる場としても重要な役割を果たしている。近年重点的に取り組んだ内容は、感覚を育てていく指導（運動）と社会性を育む指導である。

感覚を育てる指導については、始業前や運動に時間、授業の導入時を中心に行った。体幹を保持する力の弱い子ども、感覚の過敏や鈍感さを持った子ども、ボディイメージ

の弱い子どもたちには、体全体を使った粗大運動を多く取り入れた。肋木の上り下りやぶら下がり、ロープを使ってのターザンごっこ、トランポリン、スクーターボード等を使ってのサーキットは、子どもたちが汗をかきながら楽しく取り組んだ。「だるまさんが転んだ」も、姿勢保持や動静の感覚を磨く遊びとして取り入れた。社会性を育む指導は、昨年度から取り組んでいる。特別支援学級の中で行った低学年中心のソーシャルスキル指導と特別支援学級の弾力的運用としての通常学級の児童と一緒にいったソーシャルスキル指導、そして、特別支援学級の小集団指導の中で行った自立活動の指導である。特に、特別支援学級での自立活動は、生活全般に渡るソーシャルスキルそのものであり、それを繰り返し行うことが社会性を育むことにつながると考えている。昨年度と今年度は、その「ソーシャルスキルを育む」をテーマに公開授業を行った。昨年度は、「聞いて当てよう」の自立活動の授業を行った。生活の中の音に気づき、集中して聞き、イメージする学習である。「聞く」活動に大切な事柄をゲームを通して子どもたちは体感した。今年度は、「新聞紙で作ったもので遊ぼう」の生活単元学習の中で、A 小集団の子どもたちが B 小集団の子どもたちに新聞フリスビーの作り方を教えるという授業である。自分の伝えたいことをことばや動作で伝えること、相手に応じて活動することを課題に取り組んだ。

2 成果及び課題

私を含め5名の特別支援学級の教師たちで、特別支援学級の経営について毎年話し合い、取組の内容を決定している。子どもたちのそれぞれが持っている課題をできるだけ詳しく分析することでどんな指導が必要で、どのような小集団を組めばよいか検討してきた。小集団の指導は、子どもたちの活動への意欲づけに効果が見られた。特に高学年の子どもたちは、同じような活動を何度も繰り返すことにより、見通しを持つことや計画して取り組むことができるようになってきた。また、高学年としての意識が生まれ、低学年の子どもたちへ配慮する姿も見られるようになった。毎年テーマを決めて全職員に行っている公開授業は、特別支援学級の教師としての力量を磨くことにつながった。また、入級児童の理解や特別支援教育の啓発につながると考えている。そして、特別支援学級で行う指導が、通常学級の中に在籍している特別なニーズを持つ児童への支援方法の工夫に役立つことを願っている。

本校の入級児童は、年々増加傾向にある。また、子どもたちの持つ特性や保護者の願いも、多岐に渡ってきている。子どもたちそれぞれが持っている特性や課題をアセスメントすることによって理解することを進めてきたが、今後特別支援学級担任が相互に見立てや手立て、教材等を交流し合えるケース会議を設定し、定期的に持つことにより、より効果的な支援ができると思われる。そして、そのケース会議を充実させることで、特別支援学級担任としての専門性を向上していくことができると考える。



1 実践内容

(1) はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境は、学校の中において教室等で授業をしているときでさえ、子どもたちが外部からの侵入等による犯罪の可能性を意識せずに安全に過ごすことが難しくなっている。

しかし、児童も職員もそのことを敏感に感じ、常日頃から意識して行動しているかとなると、必ずしもそうとは言いきれない現状がある。

そこで、生徒指導・安全指導の立場から児童や職員がともに防犯意識を高め、その意識のもとに防犯訓練を行うことによって、万が一の場合に備えるということが必要であると考え、それを計画し、実行してきた。具体的には、職員に対しては「侵入者・危険人物に対するマニュアル」を徹底することと「職員防犯訓練」を行うことであり、児童に対しては「不審者侵入に対する防犯・避難訓練」を行うことである。



(2) 取り組みの概要

① 職員への意識の向上

◇ 侵入者・危険人物に対するマニュアル

- ・ 校舎内への侵入の限定
- ・ 侵入者への応対
- ・ 危険人物の疑いありと断定された者への対応
- ・ 危険人物への応対
- ・ 危険人物が教室等へ侵入した場合の対応
- ・ 笛・携帯電話の所持

◇ 職員の侵入者防犯訓練

- ・ マニュアルを踏まえての、不審者侵入後の職員の対応の実地訓練

② 児童への意識の向上

◇ 不審者侵入に対する防犯・避難訓練

- ・ 児童が校庭に出ているときの不審者侵入に対する避難訓練
- ・ 職員室への連絡と関係諸機関への連絡
- ・ 校舎内への児童の誘導
- ・ 不審者と児童の隔離
- ・ 捕縛、警察への引き渡し(近年は捕縛よりも牽制を中心に行うようになってきている。)



2 成果及び課題

(1) 職員の意識の向上

マニュアルを読み合わせることで、職員のひとりひとりが危機感を新たにし、いつ何が起こってもおかしくないという心構えができようになった。同時に、どのようなときにどのように対処すればよいのかが具体的に分かることによって安心感も得ることができた。

また、校内三か所にサスマタが配置され、その場所も職員に周知徹底されており、警察からの指導にもとづいて、各教室にも不審者が所持しているであろう凶器よりもリーチの長い棒などの道具を担任教師が用意するようになった。

さらに、そのマニュアルをもとにして警察の協力の下、本格的な侵入者対応の訓練を行い、得た知識を、実践を通して身につけることができた。

各教室・職員室に防犯グッズを置き、全職員が笛を所持するなどの変化がみられるが、全職員の携帯電話所持はまだ徹底できていない。



(2) 児童の意識の向上

警察の協力の下、休み時間を利用して教師の少ない運動場への不審者の侵入という設定で避難訓練を実施した。児童も職員も素早く対応し、意識の向上とともにどのように動けばよいのかということも分かりかなりの成果があった。

しかし、低学年の児童の中には不審者役の警察官を見て、怖がってトラウマとなる者もあるので、警察と協議のうえ翌年度からは不審者役を実際に配置せず、不審者が運動場に進入したという状況を想定し、校内放送を通じて不審者がどこにいるのか、どのように移動しているのかを職員・児童に知らせる形で実施している。

3 その他参考となる事項

学校の防犯的行事に関しては、逐一地元の警察と相談し、要員を派遣してもらって指導を受けている。本校ならば西和警察の管轄なので、そこをお願いしている。

1 実践内容

(1) 保健指導重点目標

毎年風邪やインフルエンザの流行時には特に、予防として「手洗い・うがい」について保健指導をしてきた。また、児童が様々な感染症から身を守り、健康な生活を送るために、手洗い・うがいの大切さに気づき、生活習慣の一つとして身につけてほしいと考え、本校の保健指導重点目標に挙げ取り組むことにした。



(2) 児童保健委員会の活動

この指導をすすめていく中で、担当している児童保健委員会でまず手洗いについて取り組むことにした。児童は手洗いの大切さは理解しているものの、なかなか時間をかけた丁寧な手洗いが出来ていなかった。そこで、丁寧に楽しく手を洗う方法として、「手洗いの歌」を作ることを考えた。できた歌を全校集会で紹介し、学級でも指導しやすいように歌を録音したCDの作成とともに、手洗いの仕方を描いたプリントを作り各学級に配布した。また、プリントは手洗い場にも掲示し、児童が見ながら洗うことができるようにした。その結果、簡単で覚えやすい歌だったので、給食前に放送で流すと、歌に合わせて手洗い場で歌いながら手を洗う児童の姿が見られた。



さらに、学校保健委員会で保健委員会の児童による「手洗いの歌」を紹介し、新型インフルエンザについての知識や予防方法について、保護者とともに考える場を設けた。そして、学校保健委員会だよりには、その時の資料や参加された方の感想、「手洗いの歌」をのせ、全保護者に知らせ広めていった。

(3) 予防Ⅰ — 基本の徹底 —

新型インフルエンザが流行し始め、教室での手指消毒用アルコールの使用が取り上げられていた。しかし、消毒用アルコールを使用することで手を洗うことがおろそかになってしまうのではないかと心配があった。私は児童が健康な生活を営む上で、「手洗い」を生活の中で習慣化することを願い、薬品を使った予防よりも「手洗い・うがい」にこだわった感染症予防の保健指導をすすめたいと考えた。ただ、手洗い指導をすすめる中で、最近、固形石鹸よりも液体や泡のポンプ式石鹸を使っている家庭がほとんどであるため、固形石鹸ではうまく泡立てることが出来ず、きれいに洗えていないことに気づいた。そこで固形石鹸に加え、泡の出るポンプ式石鹸を使い、泡を使った丁寧な手洗いをすすめた。手荒れをする児童もいるため、固形石鹸を使ったり、水だけで洗ったりしてもよいことを保健指導の中で伝えるとともに、手の汚れやすい場所やどの部分をどのように洗えばよいのか、丁寧な手の洗い方について指導した。学校医や学校薬剤師に相談すると、予防の基本は、「手洗い・うがい」だと言われた。やはり、新型インフルエンザを予防するためには、「手洗い・うがい」

1 実践内容

児童は、日常生活の中で見たり聞いたりする出来事に、興味・関心を持つ。そして、「なぜだろう。」「どうしてかな。」等の疑問を抱き、追求しようとする。日々生活する中で抱く問題を解決していくためには、問題を丁寧に把握し、状況に適応した情報の収集力、分析力など、情報リテラシーの習得が必須である。

統計・情報教育は、「とらえる」「あつめる」「まとめる」「よみとる」「いかす」(探求のプロセス)の問題解決の過程を重視する。

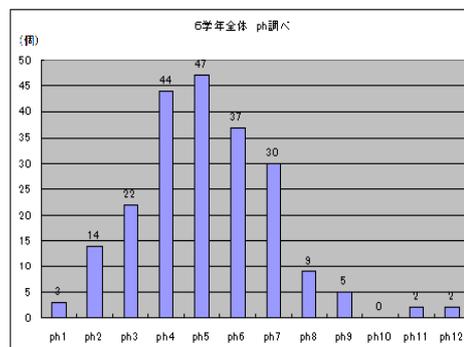
この統計的手法を効果的に使い、児童自らが問題を解決し、生活の中でいかせる力の育成を目指し、実践を重ねてきた。



(1) 実践例

① 「水よう液の性質」6年理科 児童の課題：『身の回りの物を調べよう。』

児童は、「酸性雨」に関する調べ学習の内容から、「酸性・中性・アルカリ性」に関する学習へと進む中、Ph 試験紙を用いて、様々な水溶液の性質を調べた。この日の給食のデザートに出されたブドウの汁を調べたいという希望も出された。そして、身の回りにあるもの、「ふだん手にしているものは、どういう性質を持つのだろうか。」という疑問を持つようになった。情報収集は、学年全体にも広げ、情報量を多くした。その結果を次のグラフにまとめ、傾向を4つの観点で読み取り、生活との関わりについて考えることができた。



- 第1観点——→ 全体傾向

グラフ全体の傾向を確かめる中、中性・弱酸性のものが多くことに気がついた。ふだん手にするものを調べる活動において、身体・健康や日々の生活との関係の深さを確認することができた。

- 第2観点——→ 同じ ph 内の種類

グラフを ph ごとに確認する中、「ph が同じものは、同様の働きをするのではないだろうか。」という疑問を持った。塩酸や水酸化ナトリウムの水溶液が金属を変化させる実験結果から、うめぼしやグレープフルーツ等も同様の働きをするのではないかと考えた。他のものについても確かめる実験を進めることができた。

- 第3観点——→ 条件による違い

様々なものを調べる中、名称が同じものでも ph が異なるものがあることに気がついた。用途に応じて働きが異なることや一様に身の回りのものをとらえてはいけないことに気がつくことができた。

- 第4観点——→ 食生活との関わり

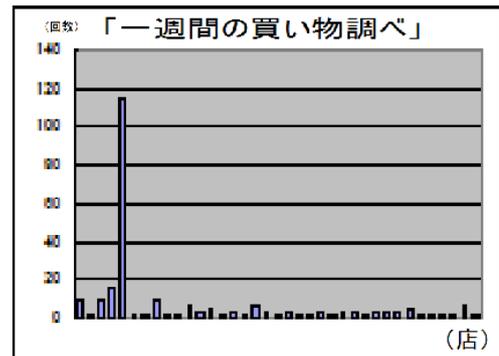
身体や健康との関係を調べる中、食生活に考えを広げ、酸性食品やアルカリ性食品と ph との関係に関心を持つことができた。そこで、学校栄養士より食品の

性質のみならず、食生活全体についても話を聞き、学習を進めることができた。児童は、実生活に基づいた学習を進める中、「身の回りのもの」や「普段、使っているもの」を新しい視点で見つめることができた。そして、「あるから使う。」
 「コマーシャルでよく見るから使う。」「印象に残る名称だから使う。」などの受動的な生活から、「自ら性質を確かめ、選択し用いる。」などの能動的な生活へと転換し始め、自発的な生活スタイルが育ち始めていった。

② 「買い物調べ」 3年社会

児童の課題：『なぜ、近くの店だけで買い物をしないのだろうか。』

児童は、敏感な金銭感覚の持ち主である。遠足のおやつのお買い物の仕方にこだわる。地域のスーパーマーケットで買い物をする機会が多い。近いから・安いから・いいものが売っているからが、その理由である。遠くに行かなくても家の近くで、充分に買い物ができる状況である。このような現状を踏まえて、一週間、家庭での買い物調べを行った。そして、結果を集約しグラフ化した。



児童は、地域のスーパーマーケットでの買い物の数が多いことは予想していたものの、他の店での買い物の数も多いことから、「なぜ、近くの店だけで買い物をしないのだろうか。」という疑問を抱いた。このことから、家庭での聞き取り調査が始まり、各家庭の工夫(広告情報の比較・家庭間での連絡網や情報交換等)、家庭事情(仕事場との関係・ATMの利用)などを知ることになる。この学習を通して、主体的、意欲的な姿勢が見られたほか、校区の店や生活を新しい視点で見つめられるようにもなった。さらに、友達的生活や生き方をも受け入れていける広い視野に立ち、深く生活を掘り起こしていくことにも結びつけていくことができた。

2 成果及び課題

児童が生活の中から題材を見つけ、身近な問題を統計的手法を用いて進めた学習は、児童に、主体的・意欲的に学習に取り組ませただけでなく、自らの生活を様々な視点で見つめさせることができた。

多くの情報をまとめ、よみとる際、全体の傾向を把握すると共に、用途や分野ごとに整理し、分析していく必要を感じた。このことにより、さらに深く生活とのつながりを理解させることができたのではないかと思われる。

今後「生活を見つめ、実生活につなげられる学習」を進めていくためには、身の回りの出来事に課題を持って取り組ませ、統計的手法を通して、独自の考えで解決していこうとする学習を積み重ねていくことが大切であると考えます。

3 その他参考となる事項

第53回 全国統計教育研究大会(佐賀大会)研究紀要

1 実践内容

昭和62年生駒郡安堵町立安堵小学校に赴任した時、学校長から経験のない私に、「金管バンドの顧問にならないか」と声をかけられたのがバンド指導者の始まりであった。音楽とは無縁の体育会系の私にとって、すべてが初めてのスタートであった。

管楽器は移調楽器である事すら知らず、専門的な指導のできなかった私はただひたすら教則本のみを徹底的に練習させた。当然つまらない練習になり、当時は児童と心が通い合わない時もあった。また楽譜上の＃＼を部員が見逃していても気付かないほどの素人であった。

安堵小学校で4年間バンド指導した後、平成3年には生駒市立あすか野小学校に転勤し、3年後にブラスバンドを創部した時も、まだまだ素人の域は脱していなかった。良い指導法とはどんなものなのか、研修会に行き学んだり、先輩の諸先生方の指導を見学させて頂いたりした。また外部講師の方に指導に来て頂いたりもしたが、そう簡単に合奏法、指揮法が身につくものでもなかった。悪戦苦闘の日々であったが、転勤してもバンド指導を続けたのかには理由があった。それは、スポーツと相通じるところもあるが、またひと味違った意味でバンド指導の素晴らしさに目覚めていったからである。

それは、良い演奏をするためには決められたルールを守る協調性が必要であること。すなわち「バンド指導＝生徒指導」そのものであり、学校教育全体に良い影響を及ぼすことである。一生懸命の演奏はたくさんの人に感動を与えることができる。また小学生においては、補欠のない全員レギュラーとしてステージに立てることにとっても共感した。

私が一貫して部員に言い続けたのが「世の中のルール、学校のルールをしっかりと守ること。それができないと良い音楽を作り出すことはできない」であった。音の強弱、音の出だしをそろえること、音符の長さをそろえること、仲間の息使いを感じ取りながらみんなで力を合わせて合奏すること、また、マーチングドリル（演奏しながら隊形変換をする演奏演技）においても、歩幅を揃える練習、左右の隊列を揃える練習などすべてのバンド活動が協調性なしには成り立たないことである。先生方にも協力してもらいながら大きく学校という枠の中で部員の指導にあたった。自分勝手は音楽を乱す元になることを部員は感じながら、普段の生活も仲間を信じて協力するなど、バンドでもクラスでも少しずつであるが変化が見られるようになった。

部員の指導には当然保護者の協力も必要であった。バンドの活動方針を理解して頂き、意思の疎通をはかるため、保護者との会話を重視した。また練習は常に公開とし、私の指導を間近で見てもらった。

平成9年から少子化により部員が減少する中、同じ生駒市の俵口小学校と合同バンドを結成したり、河合第三小学校、桜井南小学校など本校からはかなり距離のある学校と



▲ 合同で出場した全国大会の様子

も合同バンドを結成してコンクールに出場した。今までのコンクールの概念にとらわれることなくそれぞれのバンドの特性を生かしながら、座奏にダンスを取り入れたりしての出場であった。その斬新さが認められたのか、本年まで11度全国大会に出場した。あすか野単独バンドとしても3年前から連続して全国大会に出場している。

このような榮譽を頂けたのも、まさしく日々の「バンド指導＝生徒指導」を徹底して実践してきたからに他ならない。

現在バンドの練習は、毎朝7時45分～8時20分までと、月曜日と水曜日の放課後約2時間の練習、そして土曜日の一日練習である。土曜日以外はほとんど指導者のいない部員だけの練習である。与えられた目標・課題の克服のため、みんなと協力しながら自主自立して練習を進めていくことは難しいことであるが、それができるようになったことが、コンクールでの成果に繋がったと言っても過言ではない。

管楽器も打楽器も当然一朝一夕に演奏ができるものではない。「継続は力なり」をモットーに自らを常に厳しい状況に置き、切磋琢磨していくことが大切である。

我々の活動は、地域の方々も理解して下さっており、地域の夏祭り、保育園での演奏、福祉施設での演奏など積極的に実施している。平成11年には、阪神淡路大震災復興コンサートに出演させて頂いたり、奈良県で開催されたインターハイの開会式・閉会式での演奏、奈良県スポーツフェスティバルをはじめ、ミニバスケットの全国大会でのエキシビジョン演奏など、多くの場所で演奏させて頂いている。また大韓民国の小学生バンドとの交流演奏会、沖縄、山口のバンドとの交流も積極的に行っている。

このような多くの経験をさせて頂けることに、保護者や地域の方々に感謝の気持ちを忘れないことも、我々の活動の基本である。

2 成果及び課題

- ・ 全日本吹奏楽連盟主催の全国大会に10度出場、金賞に値する賞を7度受賞
※7度が合同バンド、3度があすか野単独バンドとして
- ・ 全日本マーチングバンド協会主催の全国大会に合同バンドで4年連続出場
※3年連続金賞受賞、昨年は全国1位、本年は12月18日に出場予定
- ・ 平成19年MBSこども音楽コンクール管楽合奏の部で西日本大会で優秀賞受賞、重奏の部では西日本大会で最優秀賞を受賞、全国大会に出場
- ・ 奈良県アンサンブルコンテストで10年連続金賞受賞（平成12年度～21年度）
※平成12年度から4年連続奈良県代表として関西大会に出場、すべて金賞受賞

素人の私であったが20年間で300名近い部員に恵まれ、たくさんの素晴らしい経験をするができたことに感謝すると共に、現在もいくつかの学校の鼓笛隊を指導をさせて頂いているが、今後はこの活動が更に発展していくように、後継者の育成にも力を注いでいきたい。



▲ 単独で出場した全国大会の様子

事例番号20 小学校 その他（食育推進）の部

栄養教諭の役割と学校教育活動全体で取り組む食育推進について

奈良市立東登美ヶ丘小学校 栄養教諭 吉田 廣子

1 実践内容

(1) 食育推進部の組織について

食育推進部は栄養教諭と、低・中・高・専科・特別支援学級から1名ずつ、計6名で組織している。栄養教諭が中心となり、食育推進のための企画や資料を作成し、食育推進部で検討し、職員会議で全教職員に提案し共通理解を得ている。



また、年に一度、全教職員対象に栄養教諭から食育研修会を実施している。内容については、「学校給食への理解」「食育推進の必要性と学校の役割」「児童が健康に成長するために大切なこと」「本校の肥満指導」「食生活等実態調査の結果報告」などである。そして、今年度は、昨年度に引き続き全校児童対象に「いきいき生活調べ」を実施している。

(2) 食に関する指導の主な取り組み

1年 学級活動「きゅうしょくのはなし」

2年 学級活動「野菜のパワーをしよう」
生活科「さつまいもパーティ」

3年 学級活動「食べ物の働きを知ろう～
スペシャルラーメンを考えよう～」

4年 学級活動「三色栄養と朝ごはん」

5年 学級活動「学校給食の栄養を知ろう」

家庭科「和食の良さを知ろう」「お米のひみつ」

6年 家庭科「五大栄養素を知ろう」「お弁当をつくろう」「自分の食事の栄養を考えよう」
体育科保健領域「病気の予防」、特別支援学級の取り組み



(3) 給食委員会（児童）の取り組み

① ドラえもんポスト：児童の給食への思いや調理員への感謝の気持ちなどを伝える機会が少ないことから、給食委員会で給食室の前に「ドラえもんポスト」を作り、全校児童にPRした。内容は、「いつもおいしい給食を作ってくださいありがとうございます」や「今日のうどんがおいしかったのでまた作ってください」「嫌いな野菜が食べられました」などが多く、なかには「三時のおやつも作ってください」などもある。調理員さんも子どもたちの声を聞き励みになっているようである。

② 給食の副食残量調べ

③ 給食片付けマニュアル（各学級に保管）

(4) 学校と家庭の連携を図る取り組み

① 「給食だより」の発行 ② HPによる情報公開 ③ 学校給食試食会

④ 親子料理教室開催 ⑤ 土曜参観にて「食育講演会」

(5) 学校と地域の連携を図る取り組み

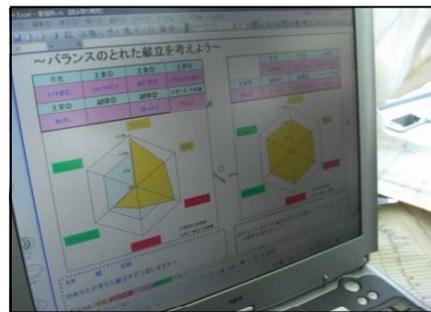
隣接の幼稚園に、「元気に成長するために」と学校の給食への不安をなくすように「給食について」の講演を行った。そこで、幼稚園の保護者のアンケートから、多く

の方が、子どもの野菜嫌いに悩まれていることがわかった。低年齢からの食育推進の重要性を感じ、今後も幼稚園との連携を続けていきたい。

(6) 個別指導の充実のための取り組み

① 食物アレルギー対応

前年度から対応している食物アレルギー児と新1年生、転入生については、食物アレルギーに関する届を提出してもらっている。校長と養護教諭、担任と栄養教諭の四者が協議をし、必要と思われる児童の保護者には家庭訪問や個別面談を行なっている。保護者と情報を交換することによって、症状が出るときの様子や対応の仕方、保護者の考え等がよくわかり、保護者と学校が連携し、お互いに安心してアレルギー対応することができると感じている。また、可能な範囲で細かい対応をすることで、子どもたちや保護者は学校に対する信頼感と学校給食への安心感につながると考えている。



② 肥満指導

養護教諭と連携し、夏休み・冬休みの前に行われる個人懇談で肥満度30%以上の児童の保護者に対して個別指導を実施している。その結果、肥満度が改善傾向の児童が多くなっている。肥満指導に取り組むことで、肥満度の改善だけでなく、児童の健康について、保護者の思いを聞きながら一緒に考えることが大切だと感じた。

(7) 給食における取り組み

調理員協力のもと、毎月19日食育の日に各クラスのおかずの1品に「星型の人参」を入れ「ラッキー人参」としている。そのことで児童は食育の日を意識し楽しみにしている。また、給食の中に選択できる1品「セレクト給食」を実施している。児童だけでなく教職員や保護者にも話題になり、楽しみで待ち遠しい給食になっているのではないかと考える。

2 成果と課題

成果としては、本校の食育は、学校長のリーダーシップにより教職員全員が食育推進の必要性を共通に理解している。そのため、栄養教諭がおこなう食に関する指導だけではなく、学年の発達段階に応じて担任が毎日の給食指導や教科とのかかわりの中でより効果的で継続的な取り組みができています。また、家庭・保護者に対して、情報を提供・発信したり、個別に相談指導をしたりすることによって、児童や保護者との信頼関係ができると考える。

また、課題としては、児童の生活習慣（睡眠）の変容が難しい。引き続き取り組みを続けていきたい。児童が、将来自らの夢を実現するために、健康な身体と豊かでたくましい心の育成を願って、さらに調理員を含む教職員や保護者、地域の方々とコミュニケーションをとり、連携を図りながら食育の取り組みを深めていきたい。

3 その他参考になる事項

東登美ヶ丘小学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/higashitomigaoka-e/>

事例番号 2 1 中学校 学校教育目標の具体化の部

「めざす学校づくり」にせまる教務主任の取り組み

川西町 式下中学校組合 立式下中学校 教諭 中川 仁志
三宅町

1 実践内容

本校では毎年、学校長からめざす学校づくりの方針が出される。本年度のめざす学校像は「明るく楽しい式下中学校」「夢と希望のある式下中学校」「あいさつを交わし相互が認め合う式下中学校」である。これらのめざす学校づくりのため、それぞれ教職員が教務部、生徒指導部や人権教育部などの各分掌に別れて具体的な取り組みを提案し、議論して学校を作りあげてきた。そのため、ここ数年生徒たちは落ち着きある学校生活を送り、学校行事での生徒の活動場面や生徒会活動も活発になるなど少しずつめざす学校に近づいている。しかし、さまざまな取り組みが行われるようになると、その準備や活動に多くの時間が必要になり、一方で確実に先生方は業務の多さに毎日忙殺されてしまうという現実と直面している。教務担当者として、めざす学校づくりを具現化させるために、時間の確保と仕事の効率化をはかることが大切な職務と感じている。



(1) 授業時間の確保 一週替わり時間割の定着—

本年度の重点目標の第1項は「基礎・基本の定着を図り、それらを活用し生き生き学び表現できる生徒を育てる」である。確かな学力こそが学校を楽しくし、生徒に夢や希望を持たせる原動力となるからである。数年前から授業時間の確保のため、「週替わりの時間割」を実施している。現在、朝の時間帯を加えた28コマの時間割を基本としているが、年間固定の時間割は作成せず、毎週週替わりの時間割を教務で作成している。2週間後の学校行事、学年の学活・道徳・総合などの予定、さらには各先生方の出張や年休を考慮して時間割を作成している。そのことによって教科のクラス毎の授業数の一括管理ができることや総合の時間をまとめて計画的にとることができるため、効果的な授業を組み立てることができる。また、自習のクラスを防ぐこともできる。さらに、週28コマを基本としているが、行事等によっての週の時間数を柔軟に変更して組むことも可能にしている。平成24年度から授業時数が現在の980時間が1015時間に増加するが、年間の総時間数を確認しながら、週の時間数を設定することもできる。

←時間割ソフト「師楽」画面

週毎・学期毎の授業時間数確認表→

(2) 事務の効率化 ―パソコンのフル活用―

本校の職員室の先生方の机上には全員パソコンのモニターが並んでいる。そして、すべてのパソコンがLANで結ばれている。そのため、各先生方が作成された教材や文書の交換もスムーズに行うことができる環境にある。この環境を使い、事務の効率化を進めた。



① 職員朝礼の効率化 ―校長の指示事項、連絡事項をディスプレイに―

本校では朝の登校指導中に職員朝礼が行われる。よって、職朝の打ち合わせが指導中の先生に届かないことがあった。そこで、フリーソフトを利用して先生方のディスプレイに連絡事項を一斉に表示することにした。また、追加連絡があった場合も画面に表示しておけば授業の合間にでも確認することができるようにした。

② 評価について ―評価、成績交換の省力化―

評価についての職員研修を行い、各教科の評価の出し方の共通理解をはかっている。そして、評価作成においてもエクセルを使用して評価の作成から成績原票の印刷までを行っている。エクセルの機能を使うことにより、より短時間で処理を行うことができるようにした。

③ 通知表について ―プリンターで打ち出す通知表―

―昨年より、通知表の形式を変更して、各学期毎の通知表にした。こちらもエクセルを使い、関数を組み込むことで担任が必要事項を入力するだけで通知表ができるようにした。学級の係や部活動などもリストから選ぶ形式にしたり、出欠席なども計算式を組み込むなどできるだけ手間がかからない通知表ファイルにしている。

2 成果と課題

学校行事の精選や組み立て方の工夫などをして、めざす学校づくりのための時間の確保と効率化を図ってきたが、それにも限界が見え始めている。次のステップとして省くことのできない諸会議を効率的に行う工夫や先生方の意識変革にせまる取り組みを校長の指示を仰ぎながら努めていきたい。

3 その他参考となる事項

式下中学校ホームページ <http://www.shikige-jh.ed.jp/>

時間割作成ソフト「師楽」 <http://www.ysknet.co.jp/index.html>

タグペタン <http://www.vector.co.jp/soft/win95/personal/se141430.html>

1 実践内容

(1) 授業づくりを大切に

私は、社会科教師として一貫して「よくわかる授業」「楽しくわかる授業」を目標に授業づくりに取り組んできた。行事準備や生徒指導などで夜遅くなっても、必ず次の日の授業ノートやプリントを作り、教材の準備をしてから学校を出ることを心がけて実行してきた。「教師として生徒の前に立つからには、生徒たちに恥ずかしくないだけの幅広い知識や見識を持っていなければならない。それを楽しくわかりやすい授業で生徒たちに教えたり、考えさせたりするのがプロとしての教師の仕事である。」と自分自身に常に言い聞かせているからである。そして、生徒たちもそんな教師の真摯な姿から「プロとして働くこと」の意味を感じ取り、自分の生き方を考える手立てとしてほしいからである。

平成15年度、現任校へ赴任しても授業作りの取り組みは変えなかった。高取中学校は、当時から若いやる気に満ち溢れた講師の先生が多い学校であった。生徒指導上の問題も多発しており、若い先生たちは必死になって毎日の仕事に取り組んでいた。しかし、部活や生徒指導や行事の取り組みなどを優先させて、授業の取り組みは二の次になってしまう現状があるように感じたので、若い先生にも何か参考になればと思い、授業づくりの取り組みだけはしんどくても続けようと思ったのである。授業を成立させるためにかなり苦労したクラスもあったが、生徒たちも次第に「おもしろい」「よくわかる」と私の授業に興味を示すようになり、併行して若い先生たちも廊下から私の授業を参観してくれるようになった。夜遅くまで授業づくりについて若い先生たちと語り合ったりもした。

(2) 「全員参加」と「ベテランから」がキーワード

平成18年度に教務主任となり、校内研修の企画をする際に、より実践的な「授業力」を高める研修をしたいと考え、校内公開研究授業を全教員の参加できる形で行うことを提案した。従来、現任校でも研究授業は行われていたが、教科の廻り持ちで授業の順番が回ってきたり、自分の授業があると参観することができなかつたりして、停滞気味で行われない年もあった。そこで3つの原則を立てた。

- ① 公開授業は、廻り持ちや順番にせず、授業づくりに意欲のある先生に何回でも行ってもらう。
- ② 若い先生に公開授業を押し付けずに、ベテランの先生が率先して行う。
- ③ すべての先生が公開授業と授業検討会に参加できるように、公開授業のクラスのみを残して行う。

ベテランの先生にはマンネリを打ち破り、これまで積み上げてきた実践を再検証してもらい良い機会であり、若い先生には教科や学年の枠を超えて、さまざまな個性あ



る授業実践を見てもらい、疑問や意見を忌憚なく述べ合う機会を作る。このことによって、ベテランも若い先生も互いに授業づくりへの関心を高めて学び合い、学校全体の「授業力」を高めることを期待したのである。

この企画は職員会議の討議を経て、1・2学期の期末テスト前（部活停止期間）に年2回行われることとなり、第1回の公開研究授業は「隗より始めよ」の故事にならって私が行った。

2 成果および課題

この職員研修は、全教員が参加することが大原則であるので、毎年年度当初の職員会議において趣旨と実施方法を教務主任より提案をして、全教職員で論議することとしている。本来、研修とは教員の自覚的主体的なものであるべきで、新しく赴任された先生にもその趣旨を理解していただいたうえで、全員の教員の合意のもとに行われることが大切と考えるからである。以来、部活動との兼ね合い、テスト前の授業時間の確保と家庭学習について、授業対象学年を何年生にするか、などさまざまな問題点が論議され、合意を積み重ねた。この話し合いこそが、全員参加の職員研修の第一歩であるといっても過言ではない。

平成18年度に始まった校内公開研究授業は、今年で5年目を迎え、一度も途切れることなく9回(平成22年度1学期現在)行われた。教科は国語・社会・数学・理科・英語の各教科で30～50代の7名の先生が公開授業を行った。授業者は、原則立候補であるが、教務主任から「ぜひ見せてほしい」とお願いした先生もあれば、校内新任研修を兼ねて、長い講師経験を経て新採用となった先生にお願いしたこともある。公開授業の後には必ず授業検討会がもたれ、すべての参加者が意見を述べ合う。ベテランの授業者も普段はあまり口にしない授業や教科に対する思いを熱く語る。若い先生も自分の授業と比較しての率直な感想や疑問点を出す。授業者以外の先生も他教科の視点から意見を述べ合う。小規模校の特性を生かしたアットホームで和やかな雰囲気の中で、授業づくりについて互いに学びあう職員研修となっている。

学校が落ち着きを取り戻す中で、次のステップとしての「授業力」の向上は、子供たちにとって学校は「学び舎」（学習の場・学力をつける場）であるという原点に立ち返った学校づくりに不可欠なことである。「よくわかる授業」「楽しくわかる授業」が、生徒や保護者・地域との新たな信頼関係の構築につながるであろう。私自身もそう考えて日々の授業づくりを積み重ねてきた。

一方で、生徒指導上の問題が多発していた頃には常態化していた「廊下に立つ先生」は、ほとんどいなくなった。学校が正常化した証しではあるが、若い先生は廊下でさまざまな個性的な授業と出合い、「しんどい生徒」と真剣に向き合うベテラン先生の姿に学んだ点が多かった。その苦労に代わるものとして、校内公開研究授業の重要性はますます高まりつつあると考えている。

1 実践内容

(1) 概要

初めての学年主任を任されたのは2年余り前である。本校が開校して9年目を迎える年であったが、生徒数も徐々に増加して、初の6クラス200名を超える生徒が入学してきた。

新しく学年をスタートするにあたり、学年所属の各メンバーの適切な役割分担と協働的な教育活動が学年経営を安定させ、さらには生徒の学習活動の充実と学級の枠を越えた人間関係の深化にもよりよい影響を与えることに繋がるであろうと考えた。

本校の教育目標は「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育てる」「鋭い人権感覚を持つ人間性豊かな生徒を育てる。」「知・徳・体の調和のとれた生徒を育てる。」である。学年経営は学級経営と学校経営の中間に位置するものであることをメンバー全員に理解をしてもらった上で、その目標具現化のための学年経営方針を6項目提示した。

- ① 学年の課題を明確にし、定期的に学年会議を行い、共通理解のもとに指導・実践にあたる。
- ② 生徒一人一人が自己の個性を理解し、生き生きと活動できる学級・学年集団づくりに努める。
- ③ 基礎的・基本的事項を確実に身につけるための指導方法の工夫に努める。
- ④ 望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育を行う。(教育課程全般において、人間関係形成能力・将来設計能力・情報活用能力・意思決定能力の育成をめざす。)
- ⑤ 生徒と教師の心のつながりを深める。
- ⑥ 家庭や地域との連携を密にしながら、保護者、地域の人々とともに生徒の健全な育成をめざす。

これらは、単に一学年に限るものではなく、三年間通じての方針として出したものである。私自身の経験から、担任はどうしても自らの学級経営に対して「自分のクラスだけは…」という想いが先立ち、俗に言われる「学級王国」的なものに陥ってしまいがちである。ところが、このことは学年が上がって担任が替わると、生徒たちは良くも悪くもそのギャップに戸惑い、心身の発達も伴い様々な問題が惹起し、教師はその対処に追われることになる。このような負のスパイラルをたちきるためには、学年教師集団の一人一人が、常にチームとしての意識を持ち、各メンバーの特性を生かしながらも、「一枚岩」のごとく連動して動くことが肝要であると考えた。学年経営とは、学年主任を中心に同一学年所属教師集団のこのような協力体制のもと、校長や他の主任等と連携をしつつ、上に挙げたような学年経営方針を推進していく営みであると理解している。



(2) 具体的取組

① 確かな人権感覚の育成をめざして

すべての教育活動の根幹に道德教育を据え、第1学年では「障害児(者)問題」・「国際理解」、第2学年では「部落問題学習」、第3学年では「反戦平和学習」をテーマに掲げ、生徒の発達段階に応じた教材の選定や、ゲストティーチャーによる一斉授業を学年全体で行うなど、日常的に人権感覚を大切にする場を設定し、自他の考えを交流しながら確かな人権感覚を育てることをめざしてきた。



沖縄修学旅行での平和集会

② 基本的な生活習慣の育成をめざして

服装の乱れや名札の付け忘れには必ず声をかける、元気な挨拶の励行、チャイム着席などの徹底、適切な言葉遣いの指導のような基本的な生活習慣を身につけさせることにおいても、学年通信の発行などを通して保護者や地域の協力理解を得ながら、学年教師集団全員で力を注いできた。

③ 感動できる生徒の育成をめざして

体育大会や校内音楽会などの学校行事の際には、常に生徒と教師が一体となり、学年全体で取り組んできた。その結果、「頑張ることから感動は生まれる」ことを実感できたことで、生徒と教師の心のつながりが深まった。



校内音楽会での学年全体合唱

2 成果及び課題

一年生の時には、いじめや暴力が日常的に起こり、集会での話しも落ち着いて聞けなかった生徒が多かったのが嘘のように、現在では、とても落ち着いた態度で日々の学校生活を楽しんでいる。しかし、一方で、望ましい人間関係をつくるのが苦手なことが原因で欠席が増加する等の問題が生じる生徒もあり、今後の課題となっている。ただ、さまざまな取り組みの成果として、「楽しむ時には思い切り楽しむ、やる時にはやる」という雰囲気や学年全体にみなぎってきたと実感できる。また、その背景には、学校長の「北中を好きになってください」という明確な学校経営ビジョンが教職員に共有され、魅力ある学校にしていこうという教職員一人一人の意識が高められたことも大きい。学校、保護者、地域の連携があっはじめて学校はよくなっていく。これらの取組で生徒の学びの意欲も向上しつつある。継続した取組によって学力向上をより確かなものにしていきたい。また、これからの取り組みやその成果を保護者や地域に情報発信する機会を多く持つことで、学校長が掲げる地域の学校としての「北中ブランド」の構築に向けてさらに尽力していきたい。

3 その他参考となる事項

香芝市立香芝北中学校メールアドレス kashibakitaj@city.kashiba.lg.jp

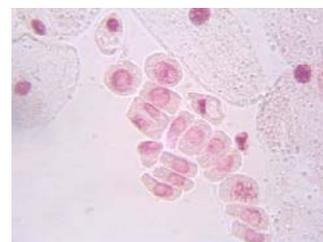
1 実践内容

生徒の知的好奇心を引き出すには、好奇心をもたらす対象を見つける援助や、知りたいことを解明する方法及び場を設ける必要がある。それらが設定されれば生徒は意欲的になる。そして、好奇心の対象が自然科学であるとき生徒は理科好きになる。



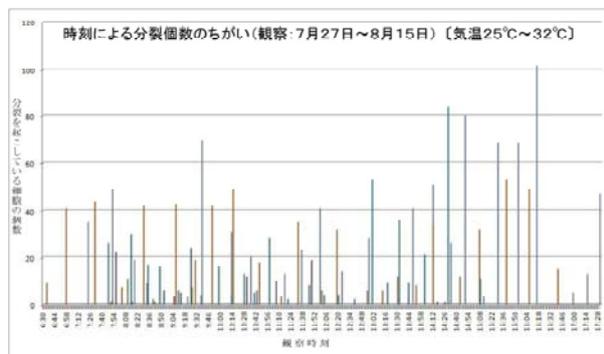
(1) 細胞分裂の観察

夏休みに希望者を募り自由研究の指導を行った。部活動を引退した3年生が数名希望した。研究対象は細胞分裂の観察である。2学期に学習するので予備調査をすることにした。タマネギの根の先端を用いた細胞分裂の観察は成功する確率がきわめて低い。だが、生命の神秘につながる内容であり、困難に挑戦することにもなる。そのような背景を利用し生徒の研究意欲を高めさせた。



教科書通りに観察を行うと全く観察できない。指導書では午前10時から10時半頃に多く分裂するとある。その時間に観察しても確認できない。数日間朝から夕方まで観察を続け、315件のデータを観察結果にまとめ、グラフを作成すると、分裂する細胞には教科書では示されていないいくつかの特徴があることがわかった。「細胞が非常に小さい」「一般細胞に比べ、核が異常に大きい」「細胞分裂が多い時間帯がいくつかある」「分裂個数は個体ごとに大きく異なる」などである。この特徴をもとに観察すると格段に探しやすくなった。長時間の観察は労力を要し根気強さも要求されたが、手がかりの発見は生徒に自信と喜びをもたらした。

成功確率が低い理由はもう一つある。生徒の技術面での未熟さである。「ピント合わせが曖昧」「闇雲に分裂細胞を探そうとする」「プレパラートの隅々まで探さない」「細胞の押しつぶしが不十分」などの実態がある。これらを考慮し2学期に授業を行った。予備観察に参加した生徒には他生徒へのアドバイスを頼んだ。分裂する細胞の特徴を予備観察時の写真をもとに説明し観察方法を整理した。前もって分裂個数が多い時間帯（午前8時頃と午後4時頃）に処理した根を用意し、授業当日作成したプレパラートで観察できない場合の予備とした。その結果、全グループが細胞分裂の観察に成功した。生徒たちの満面の笑顔が忘れられない。



(2) 鉄と硫黄の化合実験の工夫

鉄と硫黄の化合実験で、試験管の代わりに、混合物を入れたアルミホイルの長い筒を引き戸レールに乗せて行う実験方法を開発した。化合が始まると加熱をやめても反応し続けることが鮮明にわかり、硫化水素の発生実験も安全で確実に行える。これも生徒と予備実験を行った。

(3) タンポポ調査

部活動ではタンポポ調査・西日本に参加した。地域から送られるタンポポの花と種子をもとに専門機関が分布図を作成する調査である。この分布図を部員の手で作った。採取地点を地図にプロットし種類を書き入れた。身近な自然に触れ環境を意識させることができた。また、外来種や在来種の多い場所や混在している場所を確認し環境の変化を意識させた。

2 成果及び課題

- ・ 夏休みの宿題として課した自由研究を指導するという名目で、希望者による細胞分裂の予備調査を行ったため、無理なく自主的な研究が行えた。また、希望した生徒たちは意欲的に研究を行い、結果を科学的にまとめることができたので、研究成果は学生科学賞奈良県審査で優秀賞を受賞した。なお、タンポポ調査は同審査で佳作を受賞した。
- ・ 多数のデータを集める努力を重ねることにより細胞分裂の観察方法を確立できた。そのことで、他生徒の指導に有効なデータを得ることができ、今までいくら指導してもほとんどの生徒が観察することができなかつた細胞分裂の観察を、全生徒が成功するという画期的な成果をもたらした。
- ・ 学生科学賞奈良県審査での優秀賞受賞は、予備調査参加の生徒保護者にも感動を与えた。過去に、宇陀市及び宇陀郡での中学生が優秀賞を受賞したことがないからである。素質はもっていてもそれを磨く機会を与えられることが少なかった環境では、県レベルの賞を受賞することは難しかったが、それを現実のものにしたことで、理科教育に対する保護者の信頼を得ることができた。また、放課後の補習を自ら希望する生徒も現れた。進路を見据えた基礎学習や課題学習に対する意識の高揚にもつなげることができたと思う。「タンポポ調査」の佳作受賞も宇陀市及び宇陀郡での中学生では2例目である。
- ・ 観察・実験を行うと必ず全項目自己記述式のレポートを提出させる。普段は記述に各自の工夫をこらしたノートを作成させる。評価はやるべきことをすべて行って「B」である。自分なりの工夫や気づいたことが多数記入されていると「A」、数カ所の工夫だけでは「B+」である。数カ所未完成のところがあれば「B-」、多数あれば「C」である。観点ごとに同様の評価を行う。基準はすべて公開しその通りに評価する。「A」をめざし努力する前向きな意欲や態度を認めてやりたい。
- ・ 生徒の努力の背景にはわかる授業が不可欠である。教師の努力が生徒の意欲を引き出す。そして生徒自身が活動することや、努力したり前向きに行動させることを意識した指導が必要だと思う。誰もが知的レベルの高い思考ができるわけではない。個々の生徒に応じた努力のあり方を認めることも大切である。「B」評価は満足できる状態を示している。しかし、生徒にそれ以上のことを成し遂げようとさせる指導を心がけたい。

3 その他参考となる事項

奈中理ホームページアドレス <http://web1.kcn.jp/nachuri/>

1 実践内容

(1) はじめに

平成17年度から生徒指導主事となって本年度で6年目を迎える。本校の実態は、一見落ち着いているように見えるが、学校外での問題行動（深夜徘徊、万引き、自転車盗、生徒間暴力等）の件数が多く深刻な状況にある。その背景には、「家はあるが家庭のない子ども」、即ち家庭が崩壊し、親の保護能力や愛情が不足している部分が多く、その事が生徒の心の荒れにつながっていると考えられる。



これらの生徒らを取り巻く厳しい家庭環境から引き起こされる様々な問題事象に対処していく為に、学校でのきめ細やかな指導、支援は当然のこと、それに加えて市教育委員会青少年指導課、子育て課、保健所、県中央子ども家庭相談センター、奈良署生活安全課、家庭裁判所など各種関係機関との連携の中で生徒指導を進めていく必要性を痛感し、各ケースに応じた迅速かつ的確な対応を関係機関との連携の中で積極的に取り組み、学校内では可能な限り全職員に指導についての経過を報告しながら全職員の共通理解の中で情報を共有し、組織的に問題解決に取り組んできた。

また、事後処理に追われる生徒指導から脱却する為、問題を抱える生徒に関する情報をそのケースに応じて各関係機関に出向き、早い時期から相談を重ねていく中で各関係機関の間の連携のパイプをつくってもらいながら先手先手の動きをとり、生徒が少しでも良い方向に向く為の取り組みを重ねている。

(2) 生徒指導推進目標：『豊かな心を育て自他ともに生かす生徒指導』

- ① 基本的な生活習慣を身につけさせるとともに、人間としての生き方の自覚を深めさせる。
- ② 生徒理解を深め、一人一人に自己存在感を持たせるとともに、お互いの立場を認め合う共感的態度を育てる。
- ③ 決められたルールをしっかりと守っていける規範意識を育てる。

(3) 具体的な取り組みの内容

- ① 教育相談強化月間の設定：年2回（9月・1月）学級担任中心に生徒と面談し、問題の早期発見につとめる。
- ② 問題事象・行動への対応：全職員への公開＝情報の共有＝組織的対応を基本とし、同学年内、学年間、部活動顧問などあらゆる連携の中で対応していく。
- ③ 各種関係機関との連携の具体例
 - ・ 家庭裁判所調査官に非行傾向の強い生徒の情報を早い段階で報告、相談。
 - ・ 各学年でリストアップされた生徒の状況を早い段階で青少年指導課に報告し、保護者を含めた教育相談を依頼して今後の対策を相談し、指導の見通しを明確にする。
 - ・ 保護者に関わる問題（児童虐待・養育能力低下・貧困による生活困難等）について、青少年指導課への報告に加え、子育て課、中央子ども家庭相談センターへ

報告、3機関の連携を要請して具体策をたてる。

- ・ 非行傾向の強い生徒について、奈良署生活安全課に相談をかけ、警察の立場で指導してもらう。
- ・ 在校生の少年審判期日までに必ず担当調査官と接見し、本人の処遇について協議する。
- ・ 在学中に少年院送致された卒業生の進路について、少年院、保護観察所などとの連携の中で職場開拓の努力を行う。

2 成果及び課題

様々なケースに関わっていると、親が親になりきれない状況や保護者自身が親の愛情を受けずに育った為、わが子の愛し方が解らない厳しい部分があり、その『負の連鎖』の中で状況の厳しい家庭は現在も少なくないが、厳しい家庭環境の中にあってもしっかりと自分の将来を見据え、一人の人間として正しい判断ができる生徒を育てる為の取り組みを続けていきたいと考える。

過去5年間の取り組みの中で、非常に非行傾向の強い生徒の指導過程で、当時の生活安全課の係長との相談の上でこの生徒の監護措置が決定、以後この生徒の非行化に歯止めがかかり、卒業式までの生活が非常に安定し、自分なりの進路を切り開いて良い形で巣立っていった例、軽度発達障害を抱えた男子生徒が窃盗事件で逮捕された際、母親の保護能力、養育意思の希薄な厳しい状況の中で、家庭裁判所調査官との数回に及ぶ打ち合わせ、協議を重ねて医療少年院への送致が決まった例、また、学級担任が行う教育相談の中から生徒が家庭内で虐待を受けている事実が発覚、学校が母親から事情を聞き取り中央子ども家庭相談センターへ相談、通告したことで生徒への性的虐待の深刻な問題を未然に防ぐことができ、この家庭の親子関係の立て直しに大きく貢献できた例などが成果として挙げられる。

また、学校内の管理職を含めた全教員が情報を共有し、共通理解のもとで組織的に問題解決に当たってこれたことが大きな成果につながったと考える。全教員がそのケースに対応するチームとして、時には所属学年を越え、また、学級担任と部活顧問といった具合にそれぞれの役割を的確に認識し、組織として動ける教師集団の中心を担えるよう今後も精進を重ねていきたいと考える。今後の取り組みにおいても、各種関係機関とのより深い有機的な連携をとりながら、生徒らの健全育成を達成する為に、『何かが起こってからの生徒指導』だけに止まらず、『何かが起こる前の生徒指導』を追求していきたいと考える。

1 実践内容

(1) はじめに

本校の近辺には歴史的名残である“稗田環濠集落”があり、田畑に囲まれた穏やかな環境にある。生徒たちは8年前のような大きな荒れはなくなり、現在は落ち着いて授業や行事に熱心に取り組んでいる。しかし携帯電話やインターネットに関わる様々な問題は本校でも起きており、さらに経済的に厳しい家庭環境の生徒も多く、単に生徒指導上の問題としてではなく、「人間としての在り方・生き方を考える教育」を追求する必要があると感じていた。そんな中、平成19年から文部科学省の実践研究事業指定を受け「心の教育」を推進している。



(2) 主な取組

道徳教育推進教師として学校全体の計画の見直しと改善を行い、生徒会活動・生徒指導・学級経営等の実践の中で、一人ひとりの生徒と「心のキャッチボール」を大切にしながら道徳教育を推進し実践している。

① 生徒会活動

「心のキャッチボールをしよう」のスローガンのもと、「元気な挨拶」「大きな校歌」「きれいな学校」を柱に、積極的に活動している。「元気な挨拶」では、毎朝生徒会役員と学級委員が登校してくる生徒へ朝の挨拶運動を行っている。「大きな校歌」では、登校時に全校生徒が歌った校歌のテープを流したり、全校集会や行事では生徒会役員が前に立ち全校生徒とともに大きな声で校歌を歌っている。「きれいな学校」では、定期テスト最終日に「ちょ(つとした)ボラ(ンティア)活動」として花植えや清掃などを行っている。また全校集会や昼食時の校内放送では、生徒劇(ビデオ劇)を通じて全校生徒へメッセージを届けている。テーマは「いじめ」「携帯電話の危険性」など、その時々々に生徒と考えたい内容のシナリオを作っているが、劇を通して常に「心のキャッチボール」の大切さを啓蒙している。

② 生徒指導

本校は小規模校であり、学年を越えたいわゆる出授業が多く、各教職員は複数の学年の生徒を把握している場合が多い。その長所を活かして、全教職員によって生徒を共通理解し、心のふれあいを大切にしたい生徒指導に取り組んでいる。「ふれあいタイム(二者懇談)」を年2回実施し、様々な問題の早期発見につとめるとともに、生徒との心の交流を図っている。「朝の挨拶運動」は生徒会と一緒に実施し、部活動後の「下校指導」は教師で実施している。携帯電話やインターネット、自転車運転のマナー学習も、関係機関の協力を得ながら実施している。本校は複雑な家庭環境の生徒も多く、学校カウンセラーとの連携にも力を入れている。

③ 学級経営

いつも「この学級の一員でよかった」と思える学級をめざして取り組んでいる。そのためには安心して自分の意見を言える雰囲気づくりが大切である。道徳の時間は様々な生徒の考えを学級全体で認め合える時間である。じっくり時間をかけて一人ひとりの発言を大切に引き出すことを心がけ、その様子は学級通信を通じて家庭にも伝えるようにしている。また必要に応じて学年道徳の時間を設けて取り組んでいる。



④ 道徳教育

道徳教育推進教師として学校教育活動全体を通して「生徒一人ひとりの生き方を深める」ことができるよう全体計画の見直しと改善に取り組んでいる。また、道徳の時間の指導案作りなどの職員研修、公開授業などを積極的にを行い、生徒にとって魅力ある道徳の時間の実現に向けて取り組んでいる。「心のノート」をコピーして、教室や廊下に掲示物として活用したり、平成20年からは「生命の尊重」と「規範意識の向上」を中心に取り組んでいる。「命の講演会」では鈴木中人さんを迎えて「いのちのバトンタッチ」というテーマで保護者や地域の方々と共に学習した。各地で行われる道徳教育の研修にも積極的に参加し、本校で活用できることは取り入れて実践している。



2 成果及び課題

本校に着任した頃、授業が成立しにくい状況の中、いつも全員で校内巡視を行う教職員の団結力日々感動しつつ、粘り強い指導の必要性を感じていた。そして落ち着きを取り戻した今、改めて本校の特色に気付いた。もちろん長所は「心のキャッチボール」ができることである。厳しい状況の時でも教師間はもちろんのこと、生徒や保護者さらには地域の方々とのコミュニケーションを大切にしてきたのである。授業だけでなく学校生活のあらゆる場で道徳教育が行われてきたのである。教師が真剣に取り組む姿から生徒は学んできたと考える。しかし週に1時間の道徳の時間を充実した時間にするためには、専門の教科と違って教師が準備しなくてはならないことがたくさんある。生徒の実態把握はもちろん、生徒と考えたい内容について教師間でしっかりと意見交換しなければならない。忙しい毎日の中でどこまで追求していいのかは難しい。しかしその苦労があるからこそ、生徒が自分自身と深く向き合える充実した道徳の時間がつくられるのである。私の役割は、様々な研修で学んだことを先生方に伝え一緒に指導方法などを考えていくことだと思っている。生徒一人ひとりを大切にしながらじっくり向き合う道徳の時間が増え、生徒の本音を引き出しやすい体験的活動の時間を通して生き方の変容が図れるように、今後も心のキャッチボールを大切に積極的に取り組んでいきたい。

3 その他参考となる事項

大和郡山市立郡山東中学校ホームページ <http://www3.ocn.ne.jp/~khigashi>

1 実践内容

本校は奈良市の北東部に位置し、古くより名勝月ヶ瀬梅林として世に知られ、豊かな自然と文化の薫り高い地である。地域は人情が厚く、子どもは地域の宝として、支援を受けやすい環境である。

しかし近代化の波と共に、景色は変わり産業が停滞し、人口や観光客が減少してきた。郷土の良さに気づかず、都会にあこがれを持つ生徒が増えてきた。温かい地域の支援を受けながら、生徒が郷土の良さに気づき、夢と誇りを持って進んでほしい。郷土愛を育て、地域を守っていく後継者を育てるというE S D（持続発展教育）の視点から取り組んだ。この実践のねらいを次の3つの観点にまとめた。



- ① ふるさと月ヶ瀬の歴史・文化遺産を通じて、良さに気づき誇りを持つ。
Education about World Heritage
- ② さまざまな人の生き方、仕事に触れ、夢を持ち生きていこうとする態度を育てる。
Education through World Heritage
- ③ ふるさとの良さをまとめ発信したり、守っていこうとする主体的な態度を育てる。
Education for World Heritage

(1) ふるさと月ヶ瀬の歴史・文化遺産を通じて、良さに気づき誇りを持つ。

- ① 本校元校長先生である郷土史家による講演会を実施。「月ヶ瀬を次世代につなぐ」「月ヶ瀬の良さを知り、夢と誇りを持とう」「ふるさと探求との出会い、生き甲斐ー夢はきっとかなうー」「ふるさとの先人の生き方に学ぼう」を年に1・2回実施。総合的な学習の時間や全校道徳として、生き方に迫れた。この講演で生徒の関心を高め、次の「ふるさとWALK」の興味付けとした。
- ② 総合的な学習の時間に「ふるさとWALK」として、地域を4コースに分け、郷土史家の案内で散策した。「百聞は一見にしかず」の言葉通り、美しい景観と史跡の数々、お話に引き込まれる体験となった。実際に歩くと、五感を使い景色や風を感じ、郷土の良さを体感できた。



3年煎茶道学習

(2) さまざまな人の生き方、仕事に触れ、夢を持ち生きていこうとする態度を育てる。

総合的な学習の時間を使って、伝統文化を知り体験する活動を組み入れた。1年ふるさと学習では、梅産業の発祥の理由になった烏梅うばいを使う奈良晒保存会のお話を聞き、糸を紡ぎ織りの体験を行った。その後、全校ふるさと学習発表会で発表した。また月ヶ瀬の主要産業の茶業を理解し広めるために、地元茶業振興会の茶インストラクターとうちやかいを招いて「闘茶会」や「茶講演会」を全校生で体験した。3年生は地域茶道家に指導していただく「煎茶道」をシリーズで実施した。1学期終業式の後には後輩をもてなす「全校茶会」を自ら運営実施することができた。この学習は相手を思いやる「おもてなしの心」や心を落ち着かせる「集中する心」を磨くことができた。文化の薫りに包まれ、その中で体験したことをまとめ発表することができた。

(3) ふるさとの良さをまとめ発信したり、守っていこうとする主体的な態度を育てる。

- ① 一連の体験の後に、気づき考えたことをまとめ後輩や地域の方に発信する活動を

設定した。昨年度3年生は、「ふるさとWALK」から、見所を「月ヶ瀬散歩」として自ら脚本・朗読・撮影しDVDにまとめ、地域や後輩に発信した。95歳の郷土史家と15歳の青年が心を通わせながら、世代を超えてつながることができた。今年度3年生はユネスコの「私のまちのたからもの」コンテストに出品しようと、ふるさとの良さをフォトストーリーにまとめ発信している。

- ② 地域の支援を受け環境保護や福祉活動を実践した。生徒会が主体となり、地域に何かできないかと活動を進めている。15年前から「空き缶で車いすを！」(地域に呼びかけアルミ缶を毎月収集→換金→福祉施設に寄付)活動を実践してきた。花いっぱい運動は、地域に寄せ植えを寄贈する活動を進めた。また一人暮らしのお年寄りへの友愛訪問も長く続いてきた。そこに、季節の便りや誕生カードを贈る「あったかハート」プロジェクトを加え、交流を深めた。環境保護や福祉に役立つ活動は、生徒会から地域全体で取り組む活動になった。
- ③ 本校はユネスコスクールに登録し一連の活動を進めた。自分達の活動を発信できないかと今年9月に「日本ユネスコ運動全国大会 in 奈良」で、生徒会が「ふるさと学習・ボランティア・環境保護活動」を発表。私は11月、宮城教育大学「ユネスコスクール全国大会」で月ヶ瀬中学校の活動を報告し他校と交流した。活動は、地域の支援、職員の協力、生徒や家庭への啓発が不可欠である。地域・職員・生徒・家庭が繋がり、郷土愛を育てることを学校教育の柱にするプログラムが構築できた。

2 成果及び課題

郷土愛を育てたいという想いから始まり、たくさんの地域の方の支援を得て実践ができたことに感謝する。地域ぐるみのESD活動により地域に誇りと愛着が育ってきた。これらは、ユネスコの理念である「思いやりの心を持ち、助け合い、かけがえのない地球環境を守る。みんなで力を合わせる。」に合致し、ユネスコスクールに登録するきっかけとなった。郷土愛の中で育つ学校作りを推進することになり、持続可能な社会作りの担い手を育成(ESD)する教育を進めることができた。一連の学習はふるさとを知り、大切に育て、守っていく世界遺産学習である。課題は、生徒自らで郷土を守っていこうとする課題を持ち、行動していく主体性を伸ばすことである。生徒が目目を輝かせて、郷土の美しさ、歴史の深さ、偉大な先人の生き様、人情の深さにふれ、郷土に誇りを持ったことは学校評価アンケートにおいて立証された。「郷土を知る→体験→行動」のプログラムは構築できた。本校の総合的な学習のねらい「自ら学び主体的に生きる生徒の育成ー地域に根ざした学習活動を通じてー」に迫れた。また、今年度は「ふるさとWALK」を、生徒ー地域ー保護者が一体となり巡ることができた。これからも「ふるさとに夢と誇りを持とう」を合い言葉に地域と共に郷土愛を育てる学習を進めていきたい。

3 その他参考となる事項

奈良市立月ヶ瀬中学校HP : www.naracity.ed.jp/tsukigase-j
奈良市立月ヶ瀬中学校実践記録集



1 実践内容

中学校3年間の進路指導の目指すところは、生徒が自己の進路を自分自身の問題として受け止め、自分自身で解決する過程を通じて自己の意志と責任において将来の進路を選択・決定する応用力・生き方を身につけることである。

本校でも、職場体験を取り入れるなど、生き方を考える「進路指導」に努めている。しかし、今までの本校の「進路指導」は、生徒の実態を重視したことから、その指導内容も各学年、学級の工夫にゆだねることも多かった。故に、ねらい、目的を教職員が完全に共通理解して指導、支援するまでには至らなかった部分もある。また、自らの将来を見据え、目標を持ち、自ら進んで学習に励む生徒の数は、必ずしも多くはないのが実情である。生徒に生活・学習の主体者としての自覚を持たせる工夫が必要であると考えます。

このような実態を踏まえ、本校の「進路指導」では、特に将来を見通した意図的、計画的、系統的な進路指導を工夫し、推進することが重要である。そして、将来を見通した系統的な指導により育成したい、伸ばしたい力を明確にし、その力を育てることにより、変化の激しい社会で、自らの将来を前向きに考え、自分の進路を切り開くたくましさのある生徒を育てることができると考える。

(1) 具体的な取り組み

① 体験的・活動的な学習の場の設定を行う。

- ・ 高校体験入学の勧誘を積極的に行い、本年度は延べ275人の生徒が参加した。
- ・ ゲストティーチャーとして、高校から4名、ハローワークから1名来てもらい、学科内容や就職について説明してもらった。

② 低学力の克服

- ・ 2学期から週2時間の総合学習の時間を、基礎・基本の徹底の時間に充てた。
- ・ 放課後学習で、つまづいている生徒の学習指導を行った。

③ 進路だよりの発行

進路についての最新の情報を、詳細に、迅速に知らせる。(11月末現在17号発行)



▲ゲストティーチャー

④ 担任へのアドバイス

3年担任5人のうち、4人が進路指導が初めてであるため、進路指導の進め方を的確にアドバイスしている。

⑤ パソコンによる評価・成績のデータベース化

生徒に具体的かつ的確な学習指導ができるようにする。また、教員に個々の生徒の成績を把握してもらう。

⑥ 進路相談

生徒の進路に対する不安を取り除いたり、疑問に答えるため、休み時間に生徒とできるだけ接触するようにしている。

⑦ P T Aとの連携

- ・ 進路対策部に資料を提供したり、進路情報を伝えた。
- ・ 本年度から進路保護者会で、パワーポイントを使いプレゼンテーションを行った。

⑧ 進路資料の作成

懇談用の資料を数多く作成し、次年度に引き継ぐ。

2 成果及び課題

(1) 成果

- ① 進路だよりの発行により、生徒・保護者に進路学習への関心を高めさせることができた。
- ② 進路相談を行うことで、個々の生徒の理解につながった。
- ③ ゲストティーチャーとその前後の取り組みで、自分の進路について真剣に考えるようになった。

(2) 課題

- ① 生徒を見ていて、社会の一員であるという意識があまりにも希薄であると感じる。何においても、ひとつの仕事を自分も担うことによって、物事が成立していくのだと認識させたい。日々の生活（家庭と学校）において、労をいとわず、自然に体を動かし、仕事をし、その中で充実感を得られるような体験をさせる必要がある。辛抱したり、自らを律する精神力を高める体験をさせるべきだと感じる。
- ② 生徒につけさせたい力がどのくらい向上しているかを個々に把握し、さらなる向上のために、適切なアドバイス等を行う必要がある。
- ③ 活動的・体験的な学習の場の設定については、その意義について指導・支援する側が常に意識し、生徒の実態に合わせ、学習プログラムを組む必要がある。

わかりやすくやる気の出る進路指導を目指して
～大規模校における進路指導の実践と課題～

大和高田市立片塩中学校 教諭 平上 明彦

1 実践内容

本校は県中西部に位置する大和高田市にあり、全校生徒が千人を超える全国的にも有数のマンモス校である。昨年度も3年生が10クラス、376名という大所帯であった。大規模校で進路指導主事をつとめてきた中で感じた課題や問題点を、「どのように改善していけば生徒のためになるか。どうすればわかりやすい進路指導ができるのか」を考えて実践につなげるようにした。

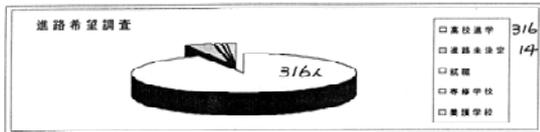


(1) わかりやすい進路指導を目指して

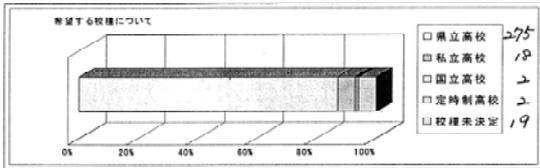
本市は交通の便がよく、県内私立・公立高校、大阪私立高校はもとより、京都府、兵庫県内の私立高校にまで通う生徒がいる。また、親の仕事関係等で転居のために他府県公立高校への進学者も毎年のように出てくる。これらの高校全ての実状を把握することは困難であり、学校内容の質問に来る生徒への対応も時間的に難しいケースが目立った。そこで、進路通信を月2回程度発行し、多くの生徒が必要であろう情報の発信につとめた。入試制度、高校紹介、体験入学等重要な連絡はもちろん、堅苦しくならないよう進路に関わるクイズ等生徒向けの記事に仕上げる工夫をした。職員室内には進路ポストを設けて生徒からの質問や悩み事の相談を受け付け、回答や自分なり

進路希望調査のまとめ

先日行った進路希望調査ですが、以下のような結果になりました。有効回答339人で、すでに高校進学を一番考えている人は316人。



実に93%以上の人が高校への進学を希望しています。そういう目標があるのであればなおさらのこと、毎日の授業時間を大切に学習を進めて行かなければなりません。何度も言われることですが、高校は義務教育ではありませんから、試験に合格しないと行くことができません。片塩中学校だけでなく県下の中学校全員の人が同じような考えで目標に向け頑張っているのです。その人たちが差ができないよう日々の頑張りが必要となってきます。



校種については圧倒的に公立高校が多く87%を占めますが、具体的な学校名をあげて私立高校や国立高校を希望する生徒も20人近くいます。学科では、圧倒的に普通科が多く、一般、特色をあわせて180人。次が商業の32人となっています。これから懇談を重ね、自分の希望と将来を考えながら、間違いない進路選択をしていきましょう。いろいろ先生方に話をしたり聞いたりしてください。

県立高校希望	275	学科未定	17人
一般普通科	168	工業科	14
		農業科	4
		家庭科	2
特色普通科	12	理数科	9
		音楽科	3
		体育科	2
商業科	32	国際科	8
		総合科	3
		美術科	1

のアドバイスを掲載することで進路に対する疑問や不安に答えていくことができた。

(2) 不登校生徒に対する取り組み

本校には不登校生徒が学年に10名程度ずつおり、本市が不登校児童生徒のために開設している適応指導教室に通っている生徒もいる。この生徒たちが進学の希望を諦

先日の進路アンケートで悩みや疑問を書いたことに少しかだけお答えしましょう。全部を掲載できずに申し訳ないですが、参考にしてくださいませ。

悩み！：高校に行けるかどうか不安です。
A： みんな同じ不安を持っています。行けるかどうか心配しないでまずは努力を始めないとダメですよ。自分自身の気の持ち方次第です。頑張れ。

悩み！：私立か公立かなかなか決められない。
A： 確かにそれぞれ特徴があります。私立は厳しいというイメージ、公立は自由が多いって感じがしませんか？入学したらして、どちらも同じくらい難しいですよ。私立は大学の附属校もあります。大学受験はその方が楽？必ずしも全員が上に進めるかどうかわかりませんよ。よく調べないとダメですぞ。一番の違いは、お金の問題。入学金、授業料等かなりの差があります。家の人との協力が無いと解決できません。しっかり話し合いましょう。

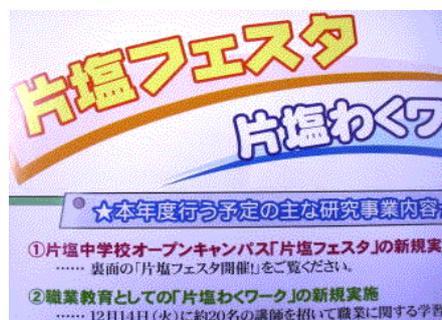
疑問！：どのくらいの成績で希望する高校に行けるかわからない。
A： 毎年、1万人近い中学3年生が入試に臨みます。その年その年で人気も上下したりします。なので一概に何点以上とか、あと何点上げないとダメとか言うこともかなり難しいです。一応、7月の懇談で過去の片塩中学校の傾向をお知らせしますが、参考程度にしてくださいね。実際、今年の中学3年生の希望や傾向がわかるのは、12月くらいです。その時になって慌てなくて良いように準備はしっかりしておいてください。とにかく点数はあるにこしたことはありません。夏休み、しっかり復習しましょう。9月から3年生の範囲もドンドン学力テストに出してきます。毎年、2学期の平均点が20点くらい下がるのです。そうならないよう、日々の努力を忘れないようにしてください。

疑問！：今の点数で行ける高校を教えてください。(上と少し違うぞ)
A： どうして今のままで満足するの？もっと努力してください。この高校に行きたいってところを見つけて頑張って欲しいなあ。行けるといって考えてたら、進学してから自分の思う高校じゃなかったら続けて行かないぞ。しっかり調べてこの学校に行きたい！という目標を決めてください。自分で調べることが大切です。学校見学、体験入学、どんな申し込んでください。インターネットで検索して探してみましょ。きっと行きたい高校が見つかるはずですよ。

めないように、進路指導は十分時間をかけて取り組むことが大切であるため、時期を早めて3年当初から取り組んだ。進路懇談が始まる前から、担任の家庭訪問や、適応指導教室と連携をとることで生徒の希望を十分に聞いた。その情報をもとに進学希望先の高校にも直接出向き、高校側と相談して、できるだけ生徒の希望を叶えられるように努力した。「環境が変われば不登校も改善される」という例もあるが、本当に通学できるようになるのか不安であるため、独自の体験入学をお願いして、生徒の状況を理解してもらう一方で、担任が何度も家庭訪問し、粘り強い励ましや指導をし、不登校生徒を含めた生徒全員の進路を保障することができた。

(3) 教職員との連携

本校は学年の職員数も多いため十分な連携が必要であった。週時案を提示し、毎朝の連絡を欠かさず連携をとった。連絡事項も多く、出願書類の整理に追われる担任の作業を考え、進路事務は同じ部屋に集まってすることを提案した。それにより生徒の情報が集めやすくなり、書類の記載内容を充実させることができた。また、職員間の会話が、生徒の情報量を確保するだけでなく、職員のリラックス効果も生み出し、気分的に楽になった。そのことで、職員全体に生徒の進路保障を頑張っていこうという意気込みを共有することができた。



2 成果および課題

進路通信は連絡だけに終わらず、質問に答えたり会話が出来るような形を目指した。3年生ではあるが、進路一色にならない心休まる通信に仕上げていくことで、生徒の不安を和らげる効果があったと思われる。生徒とは通信を通して会話が出来るようになり、「あの記事はためになった」という保護者からの感想を聞き、貢献できたことを実感した。また、中学時代に不登校傾向であった生徒の追跡情報を高校から集めたとき、毎日登校して高校生活を楽しく送っていることを知らされると、とても嬉しく思い、本当にこの仕事で頑張ってきて良かったと感動させられるものである。職員間の会話も、自分のクラスの生徒だけでなく学年全体の話におよび学年全体で関わって行く姿勢が見られるようになった。

課題として、本校は毎年300人以上の生徒を受け入れてくれる職場の確保や、時間調整の難しさから、未だに現場に出た職業体験を実施せず、調べ学習などでカバーしてきた。このため、職業を意識させた進路指導というのが不十分のように思われる。中学校の段階から将来の職業を意識し、「何を身につければよいか、その職業に就くには何が必要なのか」を考えさせ、意欲的に取り組ませる進路指導ができれば、もっと生徒の生きる力の育成につながるのではないかと思われる。そういった意味でも本年度から第2学年で20名のゲストティーチャーを招いての職業別の講演会を実施する。2年生から将来の仕事を意識させることでより充実した進路指導を目指していきたい。

3 その他参考となる事項

大和高田市立片塩中学校メールアドレス：katashio@kcn.jp

1 実践内容

奈良県立大和中央高等学校は平成 15 年の県立高校再編計画策定委員会の報告の中で定時制・通信制課程の柔軟な教育制度を大いに活用し、生徒個々の生活スタイルやペースに応じた学習の場として設置が具体化され、平成 20 年に開校した。私は平成 18 年より、奈良県教育委員会事務局学校教育課内に設置された県立学校企画調整室の一員として、県立学校の再編統合に関わる備品の調整や奈良県初の三部制単位制高校の設置準備に携わった。県内に先例はないので、他の都道府県の先進校を参考に取組んだが、財政基盤など教育を取り巻く環境が違うので、独自の工夫が必要であった。



(1) 学校設立の基本方針を象徴する校章デザインの考案

生徒の「学ぶ意欲を大切に作る学校」として、本校の設立の基本方針であり、後に校訓のひとつにもなる「自律」という言葉をもとにフレックスな学習時間を象徴した「針のない時計」という校章のデザインを平成 19 年 12 月に作成した。この校章には針のない時計に自分の針を書き加えることで生徒たちに主体的な生活設計をして欲しいという願いがこめられている。また外周のデザインは、地元筒井地区の筒井城の壕跡などに多数群生している蓮を題材として八枚の蓮弁による「蓮華座」を配した。蓮は泥の中より出でて一心に美しい花を咲かせ、その葉は水滴を完全にはじく特性を持っていることから、他に流されず自分らしさを持つという意味で生徒たちに望む姿と合致している。またこれによって輪郭を得た校章は古代の鏡にも船の舵にも見える。つまり鏡として生徒たちは自らの姿を映し、舵として自らの進路を切り開いて行ってほしいという願いも込められている。外周に沿った文字は生徒たちが国際社会に適応してグローバルに活躍してくれることを願い、エンブレム風に英語で校名と設置年を記した。校名である「中央」の文字は遠くからでも、また視力にハンディを持つ方にも判読できるようにユニヴァーサルデザインフォントを採用した。

学校長の式辞や生徒集会時の講話でしばしばこの校章の由来を話すことで生徒たちに学習に向ける姿勢をはじめとする生き方・あり方を再確認させることができている。



(2) 三部制の特徴を取り入れた教育課程及び時間割の作成

平成 20 年 4 月の開校までは、大学等への進学を希望している生徒、学校外で自分の個性を伸ばしながら高校を卒業したい生徒、仕事を持ちながら高校教育を受けたい生徒、学校に足が向きにくい不登校傾向だった生徒、高校教育に再チャレンジしたい生徒など

様々なニーズを持った生徒たちの入学を想定し、幅広い選択科目の中から自分の興味・関心や進路希望に応じた授業を選択して自分の時間割を作ることができるような教育課程及び時間割を作成した。そのために初年度から普通科でありながら家庭科や商業科の専門科目を導入した。開校後は想定していたことと実際との相違を調整するために生徒の実態や進路希望等を考慮しながらきめ細かく教育課程を更新しながら、生徒がより単位を修得しやすくなるような時間割の工夫を重ねている。具体的には教員数の増加に応じながら科目を増やし、平成 21 年度からは半期認定科目を導入し、平成 22 年度からは一気に 16 科目の学校設定科目を各教科に依頼して設置した。

(3) 出欠管理・講座登録・成績を電子処理できるシステムの開発

三部制の特徴のひとつとして登校時間は生徒の講座登録によって決まるので一律に定まっていない。従って始業前のショートホームルームはなく、出欠の確認は授業担当者が授業後すぐにパソコンに入力することによって可能となる。これを実現するために私はマイクロソフト社のデータベースソフトである Access を使って、入力から出席簿印刷に至るまでの作業を処理するデータベースを作った。また入学前の受講ガイダンスにより講座を登録させ、各種帳票を出力する機能や定期考査の成績結果を入力し、成績通知表が出力できる機能も追加した。これにより複雑な教務の管理業務を電子化できた。このシステムは平成 22 年度より専門業者の作成した教務管理システムを導入するまでの間、活用することができた。

(4) 卒業しやすい学校を目指した教務内規等ルールづくり

「履修」と「修得」を明確に区別した完全な単位制高校とするために無学年とし、74 単位以上の修得で卒業が可能としているが、特別活動の成果など修得単位以外の卒業条件を規定したり、定時制の柔軟な教育システムを最大限活用して、高校卒業程度認定試験の合格科目の単位認定、技能審査や資格取得による単位認定など学校外の単位認定の細則を定めたりした。その他、転編入学の受け入れ条件の規定、後期の履修登録追加のきまり、卒業予定者の定義など学校が完成に向かって時間が経過するに従って次々と迫ってくる新たな問題のルールづくりをした。職員は前任校が全日制、定時制、通信制、特別支援学校など多様なところからの出身者で構成されており、年齢構成もベテラン勢から新進気鋭の新任・講師まで幅広い。職員のこれまでの教育観が多様であるので調整に苦労があった。

2 成果及び課題

いままで奈良県にはなかった完全な単位制高校とするために、その中枢である教務関係のシステムを作り上げることができた。しかし少子化や教育を取り巻く環境の変化により入学してくる生徒のタイプが変化してきていることは開校 3 年目にしてもわかる。このような変化に対応できるよう、常に生徒にとって最適な教務関係システムが維持できるよう今後も研究していく必要がある。

3 その他参考となる事項

奈良県立大和中央高等学校ホームページ <http://www.nps.jp/yamato-chuo-hs>

事例番号 3 1 高等学校 学校教育目標の具体化の部

自ら考え、適切な判断で行動し、将来を切り開くことができる生徒を目指して

奈良県立大和広陵高等学校 教諭 辻本 裕明

1 実践内容

私は、昭和59年に御所工業高校で教員としてのスタートを切った。それまで自分の中で描いていた教員像とは全く異なることが多く、教科指導・生徒指導等に日々悩むことばかりであった。校務分掌は、2校目である志貴高校を含め、最も同和教育部に所属することが多く、差別事象の取組や、同和教育推進教員などを経験させていただいた。被差別の立場にある子どもたちの現実とかかわりをとおして、生徒や保護者の思いを真正面から受け止めることで、「自ら考え適切な判断で行動し、自分の将来を切り開くことができる」生徒を育てることが、自分の教員としての目標として意識するようになった。



平成13年に、3校目となる城内高校に赴任した。県立高校再編統合による城内高校としては最後の5年間を務めさせていただくことになった。年々人数が減少する中で、人数が少ないことによりあきらめることなく、最後まで充実した学校生活を送れるように、生徒たちとともに努力した。吹奏楽部の指導では、統合の最終年度まで定期演奏会を開催し、コンクールでも5年連続で金賞を受賞、県代表にも選ばれた。また、平成16年から2年間は教務主任を担当したが、学校行事等を計画する中でも、生徒数が減少することをマイナスにとらえることなく、逆にこの状況であるからこそできる取組を生徒自ら考え行動し、実現できるように努力した。

平成18年から、現在の勤務校である大和広陵高校に赴任し、平成21年度から教務主任を担当することになった。

本校では、「基本的生活習慣の確立と基礎学力の定着」「スポーツをとおしての人づくり」という目標にむけ、きめ細かな取組が実践されてきており、教務主任としてはこれまでの優れた取組を引き継ぎつつ、年々変化する生徒の実態に応じて先生方の同意のもと新たな取組をすすめるように努力している。

【基礎学力講座の取組】

新入生および卒業生に対し学校生活に対する意識調査を実施し、学習、進路、生活、部活動等に対する生徒の考え方について分析し、入学時と卒業時でその意識の変化を調査した。そのなかの学習に対する本校の生徒の考え方をみると、全体的に次のような傾向がみられた。

1. 学習の大切さ、毎日の家庭学習の重要性は、ほとんどの生徒が認識している。
2. 実際には、家庭学習の習慣は身につけておらず、考査前ですらほとんど勉強しない生徒も多い。
3. 落ち着いて授業を受ける姿勢の身につけていない生徒も多い。
4. 学年が進行するとともに、日々の家庭学習をしなくてもよいと考える生徒の割合が増加する。

上記のような実態を踏まえ、「基礎学力の定着」にむけ、本校でこれまで取り組んできた週1回の「基礎学力講座」の内容を変更した。第1・2学年は国語・数学・英語の

3教科について1教科10分程度でできるプリントを段階的に取り組み、第3学年の一般常識の学習へつなげるようにした。生徒のモチベーションを維持すること、個々の生徒の進度に応じて教材を工夫すること、これまで実践してきた漢字検定の取組を継続することなど、まだまだ改善すべき点は多いが、来年度以降も、総合学習との連携も視野に入れながらこの取組を進めていきたいと考えている。

【授業の充実】

「基礎学力講座」の実施により、改めて生徒の基礎学力について認識することができたが、私たち教員も「わかりやすい授業」を実践するために、スキルを高めることも重要であると考え、「授業研究週間」を設け、教員同士がお互いの授業を見学し、研修する機会を設けた。

- ・約1ヵ月間の期間を設け、その期間に最低1回は授業見学を実施する。
- ・自分の教科にこだわらず、教科の枠を超えて見学する。
- ・授業見学する場合には、必ず相手の先生に事前に了解を得る。
- ・見学後は、その内容について話し合い、研修を深める。

ことを原則に行った。教科の枠にとらわれないことにより、より広い視点に立った研修を行うことができたと思う。

また、他の先生方からご意見をいただいて、生徒が授業を大切にしている意識を持つように、朝および昼食後の始業5分前のチャイムと音楽、他の時間については始業1分前の予鈴を鳴らすようにした。このことにより、多少なりとも生徒があらかじめ時間を意識して行動し、時間を守ること、授業時間を大切にすることができるようになってきた。

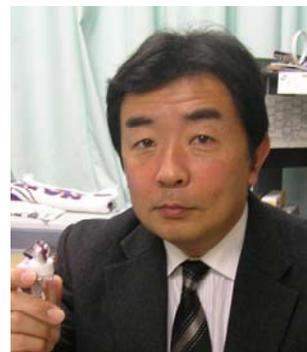
2 成果及び課題

以前、ある音楽大学の先生と食事をしているとき、その方が、「最近の学生は、自分で考えたり工夫しようと思わず、すぐに教員に答えを求めてくる。」と、具体的な例を挙げながら嘆いておられた。私たちは、生徒たちに「マニュアル」を示し、目の前の目標に対して成果を上げさせることが多くなっているように感じる。当然、そのような指導も必要ではあるが、その結果、自ら考えることをやめ、すぐに答えを求めてくる生徒も多くなり、結局は将来社会で必要な力をもった生徒を育てきれていないのではないかと感じる。時間はかかるけれども、生徒自ら考える機会を与え、生徒が適切に判断し行動していけるようになる取組が重要だと思う。また、そのためにも、生徒に「基本的な生活習慣の確立と基礎学力の定着」が重要だと思う。

今回の取組もまだまだ改善の余地があるが、今後も、生徒の実態を踏まえ、私自身これまで以上に努力し、工夫しながら、すべての教育活動をとおして、学校教育目標の達成に向けて努力をしていきたい。

1 実践内容

本校数理科学科では、大学などから最先端科学の専門家を招聘して「科学講演会」を実施してきた。これに加えて平成16年から「サイエンス・パートナーシップ・プログラム(SPP)」(現在は、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクトと改名:文部科学省・独立行政法人科学技術振興機構)に採択され、生徒が大学などの研究施設を使用させていただいて科学実験を行う「サイエンスセミナー」を実施している。^{(1), (2), (3)}さらに、平成19年から理数の「課題研究」⁽⁴⁾を大学の研究室で行っている。



このような数学と理科4分野の教育活動を活性化するプロジェクトの具体的な内容は次のとおりである。

(1)「環境とバイオ(発展Ⅱ)」[SPP](生物分野)

奈良先端科学技術大学院大学・神戸大学と連携した遺伝子組み換え技術を用いたバイオ燃料の開発(経済産業省の「NEDO」)に関する講義と実験で、その解説も行う。この取り組みは、5年前に京都大学の山中伸弥教授をお招きしてiPS細胞やES細胞について「科学講演会」を実施したことに端を発する。(奈良新聞2004.5.24)



(2)「地球・生命の歴史を推理力とコミュニケーション能力で検証するⅠ」[SPP](地学分野)

京都大学総合博物館・京都府立大学と連携して、地球の誕生から人類の出現までを、電子顕微鏡(SEM)を駆使して微化石を観察することにより、歴史を紐解きながら環境と生物の関係を生徒が話し合い検証していくプログラムである。高校生のコミュニケーション能力を推進する。(奈良新聞2005.9.28)

(3)「CRESTを高校理数教育に展開Ⅲ」[SPP](物理・化学分野)

大阪大学産業科学研究所・大阪大学大学院工学研究科・シャープ(株)研究開発本部と連携した取り組みで、文部科学省の「CREST」に関連付け、その2領域を解説し太陽電池やLED・液晶パネルなどの半導体デバイスを使っの「(キャリア教育を含む)ものづくり体験実習」である。(読売新聞2009.12.9)

(4)「課題研究」高校生と大学生・大学院生の教育活動を融合する[教育GP] (数学と物理・化学・生物・地学分野)

奈良教育大学の研究施設を使用させていただき、本校生徒が2年次に1年間を通じて同大学教員や大学生・大学院生の指導を受け理数の「課題研究」を行い、課題研究成果報告会を1月に行う。(奈良新聞2010.2.16)

また、奈良市教育委員会と奈良教育大学で締結した協定書(朝日・読売・奈良新聞2006.7.26)に基づき、奈良教育大学へ週2回出向し大学生・大学院生に研究指導を行い、そこで開発した新しい理科教材を日本理科教育学会等で発表している。

2 成果及び課題

(1) 学校内

①上記の取り組みは、生徒や保護者からたいへん好評であるばかりでなく、数理科学科の生徒の希望進路実現に大きく寄与した。(平成21年度進路資料)



②在校生が高大連携（SPP）で大阪大学に行き、SPP実習中に（本校在学中にSPPを体験し）同大学に進学した本校の卒業生から話を聞くことにより感銘を受け、同大学に進学を熱望、合格するなど教育活動の有機的循環が数理科学科の伝統となった。(平成21年度SPP実施報告書)(読売新聞2008.11.15)

(2) 学校外（近隣の小・中学校→奈良県・京都府の高校→全国の学校）

①前述の大学等とのプロジェクトにより培われた知見や開発した理科教材は、近隣の小・中学校への（親子学習会などの）出張実験（奈良・毎日新聞2009.6.28）や毎年本校で開催されている教育委員会主催の教員研修講座で地域の学校教育に活かしている。(奈良市教育委員会HP)

②SPPの内容や新しい教材について、奈良県理化学会で報告、京都理化学協会でも講演するなど高校理科教育に活用していただけるよう積極的に公開している。

③教科書（啓林館：高校「化学」）編集の内容や新学習指導要領（小・中・高）で使える実験教材として全国の学校へ広く展開している。また、本校と奈良教育大学・奈良女子大学、NHK放送技術研究所等と製作した「サイエンス番組」は、「サイエンスZERO」でも放映(2008.5.17)され全国の学校で活用されている。

今後は内容を精選し、小学校-中学校-高校-大学-企業-寺社仏閣など伝統施設との連携、さらに全国の学校へ得られた知見の成果波及を目指したい。

3 その他参考となる事項

(1)「簡易セルを使った電気化学実験」平成20年度全国理科教育大会 第79回日本理化学協会総会（神奈川大会）研究発表論文（資料）集，第30巻，146-149，2008 http://www.shimadzu-rika.co.jp/kyoiku/butsuri/denryu/135_217.html（島津理化HP）

(2)第38回東レ理科教育賞奨励賞、第39回東レ理科教育賞本賞 http://www.toray.co.jp/tsf/rika/pdf/rik_100.pdf（及び奈良日日・読売新聞2008.4.10）

(3)自作の「サイエンス映像」を活かした理数教育の展開，日本理科教育学会全国大会発表論文集，294，2009 及びサイエンス映像学会で発表(2009.3.東京大学) <http://svsnet.jp/news/57>（及び読売新聞2009.3.27）

(4)一条高校HP <http://www.naracity.ed.jp/ichijou-h/index.shtml>

4 追記

表彰とともに、もう一つ嬉しいことがあった。私が指導している部指導のソフトテニス部が沖縄インターハイ・千葉国体に出場できたことである。生徒にいつも「学業（教科）と部活動（文化・体育）の両立」を唱えているが、私もその一例を示すことができた。

1 実践内容

3年前に磯城野高校の生徒指導部長を任され、「生徒指導とは」という役割の難しさを痛切に感じている。教諭としてスタートしたのが現在の御所実業高校、次に赴任したのが、今は統合されている上牧高校、そして田原本農業高校、現在の磯城野高校である。御所工業高校時代は1年目から担任を任され、生徒と一緒に歩んできたように思う。当時の校長が私に「教師として気負わず、一先輩として子どもたちと接してくれ」と言われたのが、今でも頭の片隅に残っている。上牧高校でも1年目から担任を任されたが、色々な面で厳しく指導している学校であるという印象を持った。生徒が悪いことをすれば教師は叱るが、子どもたちには特に問題がなければ元気に明るく挨拶ができる理想的な学校であった。何よりも部活動が中心に動いている学校であった。またゴミのない、きれいな学校であったと思う。その後、田原本農業高校に赴任し、この違いが身に浸みた。中には教師を何とも思っていないような生徒もいた。どのようにしたら生徒たちの心をこちらに向けることができるのか。それは、「おはよう」「こんにちは」等の挨拶、どんなことでも良いから常に生徒たちに気軽に声をかけていくことが大切ではないかと考えた。例えば、ある生徒に注意をすると、我々の注意を無視する。追いかけて「どうして無視をするのか」と詰め寄る。生徒はいろいろと理屈を言うが、通用しないと膨れる。そこでもうひとつ檄を飛ばし、反発心を買いながらもマンツーマンで親身になって話を聞く。そこから人間関係が築かれていく。本当は叱りとばす教師でなく、叱らない教師でありたいと思うのだが、現実には理想通りにはいかない。褒めることは簡単であるが、今の時代、小さい頃から叱られていない子どもたちが多いため、叱られると異常な反応を示す生徒がいる。少し大きな声を出すだけで「どうしてそんなに怒鳴るのか」という生徒もいる。叱ることは難しい。しかしその経験をしないまま育てば、世の中に出てから上司に注意され、叱られれば仕事を我慢できなくなり、直ぐに辞めてしまうのではないかと。私はそのような思いから今後も生徒に厳しく接しながらも心で通じ合える関係を築くように努力している。また、日頃の授業において1時間集中させることができるのも、この生徒との信頼関係があればこそであり、このことが生徒指導にも繋がることと思っている。



<具体的取組>

(1) 全校集会

月に1回、7限目に全校集会を行っている。日頃、気が付いた点を生徒に訴えかけ、特に「挨拶のできること」と「きれいな学校に」ということを主眼に伝えている。また警察等関係諸機関からの連絡も伝えるようにしている。

(2) 遅刻指導

校門指導を毎朝実施し、服装等を注意している。特に遅刻した生徒への指導に重点を置き、遅刻生徒には持ち物検査を実施している。また、遅刻が増えてきた生徒に対

しては居残り指導（放課後20分程度でできる漢字、四字熟語、英単語を書かせる。）をさせている。この居残り指導を実施してからは遅刻生徒が減ってきたが、遅刻を繰り返す生徒に対する指導を工夫する必要がある。

(3) 頭髪指導

月に1回、全校集会後、各学年主任と各学年の生徒指導部の教員が中心となり、実施している。以前は頭髪の違反生徒は直ぐに帰宅させ、正して学校へ戻って来るように指導していたが、学校へ戻って来る生徒が少なく、生徒の安全面も考え、2年前から学校で居残り指導（放課後1時間程度でできる漢字の練習）をするようにした。遅刻者数が減ったのと同じように茶髪の生徒も少なくなってきた。今後は茶髪にしないような心を育てることに重点を置き指導したい。

(4) 安全教育

原付免許取得生集会を行い、教師自らが日頃の経験を生かして、生徒の交通安全に対する意識を高めている。田原本警察署の協力で命の大切さと薬物の怖さを理解させるために薬物乱用防止教室を開催している。また、携帯電話での様々なトラブルを少しでも解消するために講演会を実施し、講話による指導を行っている。

最近不審者が多く出没しているため、2年前から女子生徒を対象に護身術講習会を実施している。

(5) 地域社会との連携

農業科の教員と生徒が作った農産物・加工品を毎週火曜日の放課後販売し、また近所に販売に行き、近隣の方から好評を得ている。生徒会を中心に月に1～2回、田原本駅までの通学路清掃ボランティア活動を行っている。家庭クラブでは春・秋の交通安全週間中に自分たちが作成したマスコットを配布し、交通安全啓発運動を行っている。

2 成果及び課題

本校は農業系3学科8コース、家庭系3学科5コースで構成されている。学科・コース別にそれぞれ専門の授業を生徒たちは受けている。各クラスはそれぞれ違った特徴があり、一貫した指導が難しい状況にあるが、各クラスの担任が各クラスの状態を把握し、生徒たちの心をうまくつかみ、クラス運営を工夫されているように思われる。ただ最近精神的に不安定な生徒が増えてきているので相当苦労されているようである。生徒指導部が少しでもバックアップできるような体制を考えていかなければならない。

本校は、学校教育目標にも掲げられているように「産業社会の発展に、主体的・創造的に貢献できるスペシャリストの育成」を目指しているため、すぐに社会へ出て通用できる人間に育てなければならない。正に「生きる力」を育てることが急務である。それには日頃から学習面だけでなく、生活指導面の指導が大切になってくるのではないかと。遅刻指導、頭髪指導においてはかなり成果が上がっているように思われる。今後は服装指導においてどのように取り組んでいったらよいのかを検討し、生徒たちの人間力を高める教育を実践していく所存である。

3 その他参考となる事項

奈良県立磯城野高等学校ホームページ <http://www.shikino.ed.jp>

1 実践内容

平成20年4月に広汎性発達障害を持つ生徒（以下、本人と記す）が入学し、学校体制での特別支援教育に取り組んできた。本人の状況は、こだわりが非常に強く、気になることをきちっと済まないと次のことができないということと、生徒同士のコミュニケーションがほとんど取れないということであった。



教育環境の支援として本人がクラスで過ごしやすいように同じ出身中学で特に本人に理解的であった生徒を同じクラスにしてもらった。また、担任と副担任のほかに特別支援教育コーディネーターである私も二人目の副担任として本人のクラスを担当させてもらった。そして、保健室の中にある相談室を本人の特別支援の場として使用することになった。

職員の共通理解を得るために、特別支援教育の校内委員会の他に、学期の初めや学期末の職員会議で本人の状況を伝えた。また、授業での本人への対応や昼休み・放課後の教室での対応、相談室での対応について支援を訴えた。

本人には毎日授業が終わると相談室に来るようにと言った。クラスの者とは話すことができないが、担任・副担任・養護教諭とは、話ができるようになった。その日にあったことを話すと落ち着くようであった。そして、次第に学校に慣れていったようである。しかし、高等学校において日頃の生活面とともに、進級に関わる成績のことが重大な問題である。本人は授業を聞きながらノートをとることが苦手である。また、本人のこだわりで満足するような状態にノート整理ができないと提出することができない。それを補うためにプリントやノートを相談室で完成させた。本人もこだわりが強く、満足する状態になるまで帰ろうとしない。際限がないのでなんとか帰らせようとして、養護教諭、学級担任、学年担当者、教科担当者に協力してもらったが、本人を納得させて下校させるのが非常に大変であった。しかしながら、課題提出をきちんとすることで学期末や学年末も成績不振の科目はなかった。

本校職員の共通理解による特別支援が学習面と生活面にわたっての大きな支援になったことは言うまでもないが、学校外の専門機関にも多くの支援を受けた。教育研究所の特別支援教育部には、発達障害についての校内研修会の講師をお願いした。また、本人のことで何度か特別支援教育部へ行って、相談させてもらった。

1年生の時から現在まで、定期的に1ヶ月に2回、スクールカウンセリングを受けることができた。本人の日頃の悩みや要望を聞いてもらうほかに、社会性を身につける、ソーシャル・スキルトレーニングも受けている。

学校外の研修会としては県の特別支援教育コーディネーターの研修会の他に、御所市の人権教育研究会の実施する交流会に参加したが、非常に有益であった。市内の校區別

に保育所から高等学校までの職員が集まり、各校の実践を報告し合った。本人の日頃の様子を出身中学の先生に知ってもらったり、それに関連した支援のことが聞けた。本人の小学校時代の担任にその時の本人の様子を聞くこともできて、今の本人だけでなく、小学校・中学校と現在とに及ぶ広い視点で本人を見ることができるようになった。日頃の教室や相談室での本人の様子を見てみると、学年を追って学校生活に慣れ親しんできているようである。また、教職員・生徒の支援も本人に受け入れられてきたようすである。

2 成果及び課題

次に本人の周りの生徒たちにどういふ変化が起こったかについて振り返ってみたい。授業、学校行事、休憩時間に本人のまわりの様子を見てみると、本人がノートやプリントを提出できずにいると、代わりに出してくれる者が出てきた。また、体育の時間の前で更衣に手間取っていると教室の鍵を閉めるのを待ってくれた。掃除などの作業の時にはいっしょに協力して行動してくれる者が増えてきた。

2年生になっての修学旅行は、行く前は不安があった。ホテルの部屋でコミュニケーションの苦手な本人がどうするだろうかということであった。そのことで担任が日頃特に本人に対して理解を示している生徒と同室にしてくれた。その生徒たちは休み時間や放課後に本人のまわりに集まり、声を掛けてくれており、その様子を見ていところちらも少しずつ不安は薄れていった。3泊4日の修学旅行は本人にとって初めての経験であったが、旅行の後は何かと自信が備わってきているのを感じた。社会性やコミュニケーションにはまだ多くの課題を抱えているが、少しずつそれを身につけようとしているように思える。



それから、3年生になれば本人の進路に関わる指導や支援が大きな課題である。本人自身が、将来どのような仕事をしたいのかがつかめていないのである。本校での進路指導の他に、専門機関で適性検査を受けたり、発達障害者の就労機関・保護者・スクールカウンセラーと連携をとるようにした。会社や作業所の見学に行って、本人の反応を見た。現在、受験の手続きを済ませ、試験の勉強や面接の練習に取り組んでいる。

今後の課題としては、スクールカウンセラーによるソーシャル・スキルトレーニングの機会を増やしていきたい。また、発達障害者の支援機関や就労支援機関と連携してジョブコーチやサポートをお願いしたり、卒業してからの社会生活につながる支援をめざしていきたい。

3 その他参考となる事項

ホームページアドレス : <http://www.pref-nara.ed.jp/seisho-hs/>

1 実践内容

私のサッカー指導歴は前任校の二階堂高校で10年間現在の香芝高校で6年間、併せて16年間になる。この間、私は両校において毎年約80名という多くの部員に恵まれて活動を行ってきた。

Jリーグ発足以来、日本にもサッカー文化が定着し、現在ほとんどが小学生の頃からクラブチーム等に所属して経験を積んでいる。彼らにとってサッカーは生活の一部になっていて保護者の関心も高く、サッカーを通して教育活動をすることはとても有効である。

日本サッカーの父と称されるデットマール・クラマー氏が「グラウンドはサッカーをやるだけの所ではない。人間として修練の場である」「サッカーは人生の鏡である。そこには人生のあらゆるものが映る」という名言を残したが、これらはまさしく私の指導の根底にある言葉である。

私の指導目標は、サッカーという競技を通して自分自身に自信と誇りをもつ生徒を育成することであり、一人一人がやる気に満ちた個性的な戦う集団を作ることである。指導にあたり、以下のことに留意した。

- ① 練習場所と時間の確保……本校の練習場所はせいぜい20名～30名の活動スペースしかないので、時間差を設定して顧問が協力しながら指導にあたっている。また、香芝フットサルパーク（地域貢献）や奈良産業大学（近隣学校への開放）には、練習場所を頻繁に提供していただいている。
- ② 試合数の確保……練習試合や公式戦に全員が出場できるように複数チームで大会にエントリーし、みんなが高いモチベーションで過ごせるようにしている。
- ③ 顧問の協力……①や②に関して4人の顧問が共通した認識をもって仕事を分担し、同時に部員のメンタル面のケアが疎かにならないことに配慮している。
- ④ サッカーノートの導入……このノートを通して目標設定と到達度の確認を行い、ふだんの言動から把握できなかったことを発見し、指導に役立てている。
- ⑤ 毎日のメール配信……携帯電話所持率が100%であるので、練習場所や時刻・内容等の確認をコミュニケーションも含めて一斉送信している。
- ⑥ 保護者との情報交換……3年前より保護者会ができたので、試合の応援・激励会・お別れ会等のイベントで情報交換を積極的に行い、連絡を密にしている。

最後に、選手の個性を引き出したチーム作りをするためには、自立した選手・自律できる選手でなければならないと考えている。しっかりとしたパーソナリティが確立されていなければ、個性は活かしきれない。

練習内容については、シンプルなメニューを考えながら粘り強く行うことを徹底し、今後も続けたい。



▲ 約80名の部員

2 成果及び課題

高校3年間で、生徒が退部することなく、3年生の選手権予選まで活動を続けている。生徒間の競争意識も年々高まり、固定されることなく多くの選手が公式戦に出場して活躍し、チーム実績も着実に向上している。戦績は以下の通りである。

- ・U-18奈良県サッカーリーグ2009（前期）1部リーグ優勝
- ・U-18奈良県サッカーリーグ2009（後期）1部リーグ準優勝
- ・U-18奈良県サッカーリーグ2010（前期）1部リーグ第3位
- ・2009年度 新人大会 第3位
- ・2010年度 全国高等学校総合体育大会サッカー競技奈良県大会 ベスト4
- ・2010年度 第89回全国高等学校サッカー選手権大会奈良大会 優勝



▲決勝戦後の記念撮影

本年度は、念願の全国大会初出場を果たした。県立高校としては平成12年度に耳成高等学校が出場して以来、10年ぶりの出場になる。準決勝の奈良育英高校戦、決勝の一条高校戦において無失点で守れたところに日頃のトレーニング成果が出て、大きな勝因となったと考えている。

今後も選手一人一人の個性を大切に考えた指導方法を追求して、全国の舞台で挑戦していきたいと考えている。

3 その他 参考となる事項

- ・奈良県立香芝高等学校ホームページ <http://www.kashiba-h.ed.jp/>
- ・奈良県立香芝高等学校サッカー部WEB SITE
http://www.geocities.co.jp/kashiba_soccer/